

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2022年6月22日

【事業年度】 第118期（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

【会社名】 日本鑄鉄管株式会社

【英訳名】 NIPPON CHUTETSUKAN K.K.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 日下修一

【本店の所在の場所】 埼玉県久喜市菖蒲町昭和沼1番地

【電話番号】 0480(85)1101(代)

【事務連絡者氏名】 取締役（総務担当） 大木勝裕

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区築地一丁目12番22号

【電話番号】 03(3546)7675(代)

【事務連絡者氏名】 取締役（総務担当） 大木勝裕

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
（東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第114期	第115期	第116期	第117期	第118期
決算年月	2018年3月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月
売上高 (百万円)	12,983	12,877	13,576	14,663	15,185
経常利益又は経常損失() (百万円)	109	1,020	567	730	417
親会社株主に帰属する 当期純利益 又は親会社株主に帰属する 当期純損失() (百万円)	35	4,733	502	661	236
包括利益 (百万円)	133	4,661	334	917	232
純資産額 (百万円)	11,977	7,245	7,576	8,291	8,392
総資産額 (百万円)	19,601	15,309	16,319	17,127	17,780
1株当たり純資産額 (円)	3,566.51	2,122.91	2,219.43	2,490.51	2,516.47
1株当たり当期純利益又は 当期純損失() (円)	10.66	1,438.59	152.80	202.90	73.52
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	59.9	45.6	44.7	46.7	45.5
自己資本利益率 (%)	-	-	7.0	8.6	2.9
株価収益率 (倍)	-	-	8.4	7.2	14.5
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	1,337	448	1,040	1,040	419
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	750	925	446	579	802
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	162	370	33	234	183
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	2,988	2,881	3,442	3,678	3,111
従業員数 (名)	340	321	325	365	379

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 第115期における親会社株主に帰属する当期純損失の大幅な増加は、固定資産に係る多額の減損損失の計上等によるものであります。
3. 2018年10月1日付けで普通株式10株につき普通株式1株の割合で株式併合を行っております。第114期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益又は当期純損失()を算定しております。
4. 第114期及び第115期の自己資本利益率は、親会社株主に帰属する当期純損失が計上されているため記載しておりません。また、株価収益率も、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
5. 従業員数は、就業人員であります。(再雇用嘱託社員及び契約社員を含み、当社グループから当社グループ外への出向者を除き、当社グループ外から当社グループへの出向者を含んでおります。)
6. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第118期の期首から適用しており、第118期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第114期	第115期	第116期	第117期	第118期
決算年月	2018年3月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月
売上高 (百万円)	9,708	9,265	9,214	9,787	9,906
経常利益又は経常損失() (百万円)	101	1,224	365	459	120
当期純利益又は 当期純損失() (百万円)	98	4,831	405	530	125
資本金 (百万円)	1,855	1,855	1,855	1,855	1,855
発行済株式総数 (株)	32,930,749	3,293,074	3,293,074	3,293,074	3,293,074
純資産額 (百万円)	10,875	5,973	6,363	6,705	6,696
総資産額 (百万円)	17,425	12,754	13,602	14,079	14,676
1株当たり純資産額 (円)	3,305.57	1,815.66	1,934.21	2,086.73	2,084.18
1株当たり配当額 (1株当たり中間配当額) (円)	2.00 ()	()	30.00 (-)	40.00 (-)	22.00 (-)
1株当たり当期純利益又は 当期純損失() (円)	30.08	1,468.48	123.17	162.65	39.12
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	62.4	46.8	46.8	47.6	45.6
自己資本利益率 (%)	-	-	6.6	8.1	1.9
株価収益率 (倍)	-	-	10.4	9.0	27.2
配当性向 (%)	-	-	24.4	24.6	56.2
従業員数 (名)	282	258	263	287	300
株主総利回り (%) (比較指標：配当込TOPIX)	90.6 (115.9)	51.1 (110.0)	74.0 (99.6)	85.9 (141.5)	65.2 (144.3)
最高株価 (円)	194	179 [1,750]	2,037	1,606	1,487
最低株価 (円)	157	149 [843]	601	1,130	989

- (注) 1. 第115期における当期純損失の大幅な増加は、固定資産に係る多額の減損損失の計上等によるものであります。
2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 2018年10月1日付けで普通株式10株につき普通株式1株の割合で株式併合を行っております。第114期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益又は当期純損失()を算定しております。
4. 第114期及び第115期の自己資本利益率は、当期純損失が計上されているため記載しておりません。また、株価収益率及び配当性向も、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
5. 従業員数は、就業人員であります。(再雇用嘱託社員及び契約社員を含み、当社から他社への出向者を除き、他社から当社への出向者を含んでおります。)
6. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所第一部におけるものであります。
7. 2018年10月1日付けで普通株式10株につき普通株式1株の割合で株式併合を実施したため、第115期の株価については株式併合前の最高・最低株価を記載し、[]にて株式併合後の最高・最低株価を記載しております。
8. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第118期の期首から適用しており、第118期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

1937年10月	東洋精機株式会社を埼玉県蕨市に設立、資本金48万円。
1939年2月	社名を東洋精工工業株式会社と変更、内燃機関用ピストン及びピストンリングを製造。
1949年12月	ガス、水道用鑄鉄管（立型鑄鉄管）の製造を開始。
1952年3月	東京営業所を開設。
1954年9月	遠心力砂型鑄鉄管の製造開始。
1960年1月	社名を日本鑄鉄管株式会社と変更、資本金1億5,000万円。
1962年1月	本社を東京に移す。
1962年7月	東京証券取引所市場第二部に上場。
1963年5月	ダクタイル鑄鉄管（大口径管）の製造を開始。
1965年12月	建設業法による大臣登録の認可を受ける。
1967年4月	中部支社（名古屋市）を開設。
1969年7月	東北支社（仙台市）を開設。
1976年1月	北海道支社（札幌市）を開設。
1978年6月	倉庫業務、運送業務を開始。
1981年5月	工場を埼玉県久喜市菖蒲町へ全面移転。
1986年3月	鉄蓋工場（埼玉県久喜市）を買収し、製造を開始。
1989年8月	多目的鑄造設備を導入。
1993年9月	東京証券取引所市場第一部に上場。
1996年3月	第1回無担保転換社債（調達資金30億円）の発行。
1997年4月	日鑄商事株式会社の全株式を取得（現・連結子会社）。
1998年1月	レジンコンクリート管の製造を開始。
1998年8月	ポリエチレン管の製造を開始。
2000年9月	九州支社（福岡市）を開設。
2001年11月	日鑄サービス株式会社を設立（現・連結子会社）。
2003年4月	エンジニアリング事業を開始。
2004年1月	株式会社鶴見工材センターを設立（現・連結子会社）。
2006年2月	利根鉄工株式会社の株式を取得（現・高崎工場）。
2009年10月	本社を埼玉県久喜市菖蒲町の工場へ全面移転。
2009年11月	東京事務所を開設。
2014年4月	利根鉄工株式会社を吸収合併（現・高崎工場）。
2019年6月	本店を埼玉県久喜市へ移転。
2019年7月	本社を東京都中央区へ移転。
2020年3月	日鑄商事株式会社が株式会社イガラシを設立（現・連結子会社）。
2022年4月	東京証券取引所スタンダード市場へ移行。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は出資金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(連結子会社) 日鑄商事(株) (注) 2, 5	埼玉県 戸田市	28	ダクタイル鑄鉄関連, 樹脂管・ガス関連	100.0	・役員の兼任 2 名 ・営業上の取引 当社製品の販売店
(株)鶴見工材センター	神奈川県 横浜市 鶴見区	50	樹脂管・ガス関連	60.0	・役員の兼任 3 名 ・営業上の取引 ガス用配管材等の保管 及び輸送の委託先 ・資金の預かり
日鑄サービス(株)	神奈川県 横浜市 鶴見区	40	樹脂管・ガス関連	100.0	・役員の兼任 3 名 ・営業上の取引 原材料の購入先 ・資金の預かり
(株)イガラシ	埼玉県 さいたま市 緑区	10	ダクタイル鑄鉄関連	100.0 〔100.0〕	・日鑄商事株式会社の完全 子会社
(その他の関係会社) ジェイ エフ イー ホールディングス(株) (注) 3	東京都 千代田区	147,143	鉄鋼業、総合エンジニ アリング業等を行う子 会社の持株会社	(30.0) 〔30.0〕	・J F E スチール株式会 社の完全親会社
J F E スチール(株)	東京都 千代田区	239,644	鉄鋼事業	(30.0) 〔 0.1〕	・営業上の取引 原材料等の購入先

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。
2. 特定子会社であります。
3. 有価証券報告書提出会社であります。
4. 「議決権の所有(又は被所有)割合」欄の〔内書〕は間接所有割合又は間接被所有割合であります。
5. 日鑄商事株式会社については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	売上高	6,395 百万円
	経常利益	192 "
	当期純利益	124 "
	純資産額	458 "
	総資産額	3,288 "

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2022年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(名)
ダクティル鑄鉄関連	318
樹脂管・ガス関連	35
全社(共通)	26
合計	379

(注) 1. 従業員数は、就業人員であります。(再雇用嘱託社員及び契約社員を含み、当社グループから当社グループ外への出向者を除き、当社グループ外から当社グループへの出向者を含んでおります。)
 2. 全社(共通)は、当社の総務及び経理等の管理部門の従業員であります。

(2) 提出会社の状況

2022年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
300	45.8	19.0	5,941

セグメントの名称	従業員数(名)
ダクティル鑄鉄関連	266
樹脂管・ガス関連	8
全社(共通)	26
合計	300

(注) 1. 従業員数は、就業人員であります。(再雇用嘱託社員及び契約社員を含み、当社から他社への出向者を除き、他社から当社への出向者を含んでおります。)
 2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
 3. 全社(共通)は、総務及び経理等の管理部門の従業員であります。

(3) 労働組合の状況

当社グループには、JAM日本鑄鉄管労働組合が組織されており、2022年3月31日現在組合員数は232名であります。

なお、労使関係については円滑な関係にあり、特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社は上下水道、ガス、情報通信を中心とした地域インフラ整備に対して、鑄鉄管、鉄蓋、樹脂管及び関連資材の供給を中心とした事業展開を図ってまいりました。インフラに携わる企業として、その機能の維持継続が使命と考えております。しかしながら、管路老朽化が年々進展し更新の潜在需要が増大する一方、人口減少や節水等による事業体収入の減少や、高齢化等による工事の担い手不足といったジレンマが解消されない状態が継続しており、管の供給だけにとどまっていたら、使命を果たすことができないという危機意識から、劣化診断サービスの提供等、管路更新サイクル全般に関与する事業スタイルへのシフトチェンジ、すなわち「管路分野のInnovative All in ワンストップ企業」としての地位を確立すべく、活動を続けております。そうした役割を担うことにより、社会的な使命を果たしつつ、継続的に発展していく企業を目指し、環境変化に俊敏かつ柔軟に対応できる企業体質の強化を推し進めてまいります。

今後も、継続的に株主様等のステークホルダーの皆様にお役立ちできるよう努めてまいります。

(2) 対処すべき課題

鑄鉄管等コア事業の収益力強化

上記基本方針に沿って、以下の3点を課題として取り組んでまいります。

- (1) 販売力の強化に向けた新商品・新分野を含めた開発・拡販と需要喚起
- (2) コスト競争力の一層の向上
- (3) 人材育成の強化と女性活躍の推進ならびにESG経営の推進

これらの課題に対する主な取り組みは以下の通りです。

1) AIを活用した管路劣化診断技術の普及と拡販

事業スタイル変革の第一歩として、2018年より、Fracta社とのパートナーシップ契約に基づき、同社のAIを活用した管路劣化診断技術の事業体様への展開を進めてまいりました。その有効性が高く評価され、年々着実に事業体様での採用を拡大してきております。この普及活動にさらにドライブをかけ、拡販に注力してまいります。

2) 環境インフラのデジタル情報基盤の整備

2021年度はWhole Earth Foundationとともに、環境インフラのデジタル情報基盤の整備のための実証実験となる、「鉄とコンクリートの守り人(マンホール聖戦)」の全国展開と地方開催を実施、短期間での情報収集を実現しました。事業体様との連携を深め、一層環境インフラのデジタル情報基盤の整備に寄与できるよう推進してまいります。

3) DB(デザイン&ビルド)の推進

2019年度にグループ会社で設立した工事部門を一層強化するとともに2021年4月にエンジニアリング部を新設し、グループ会社やパートナー会社との連携を進めてまいりました。DB(デザイン&ビルド)やメンテナンスも含めたDB(デザイン&ビルド&メンテナンス)として、「管路分野のInnovative All in ワンストップ企業」の中で位置づけられる様に進めてまいります。

4) 新商品「楽ちゃく」の販売

楽に、早く、確実に一人でも接合できるプリセット接合工具を開発し、販売開始いたしました。誰でも、楽で正確な接合ができること、従来の半分の時間で接合が可能、作業は管上部からできるクリーン施工の三点をセールスポイントとして、拡販を進めてまいります。

5) 「オセール」の拡販

鉄道、交差点、河川横断等、開削工事が困難な箇所で行う非開削工法における、耐震性能を維持するための治具として、当社は、地上で組み立てが極めて容易で、画期的に工数の削減が可能な「オセール」を開発し、2019年6月より販売開始、2020年度・2021年度と拡販を進めてまいりました。この商品の有用性をさらに広くアピールしていき、認知度を一層向上させ、さらなる拡販を図ってまいります。

6) 水研様との業務提携の強化

2020年10月に発表しました水研様との業務提携により、新商品の開発・量産化など進めてきております。当社にとっては、操業度の向上による収益基盤の強化等、水研様にとっては、当社からの安価材料調達や当社およびJFEグループの販売網を活用した拡販等のメリットがあり、さらなる連携を深め、収益力の強化につなげてまいります。

7) 更なる新商品開発とイノベーション

「オセール」・「楽ちやく」に続く、イノベティブな新商品開発を実現し、コア事業とのシナジー効果の創出を図ってまいります。

8) 一層の合理化の追求と品質の向上

2018年度に大規模合理化を実施し、単年度で中期3か年計画を大きく上回る成果を出しました。2019年度以降も継続したコスト削減活動を実施してきております。引き続き、歩留向上、エネルギーコスト改善、操業の効率化やお客様の満足度を高めるための継続的な品質向上活動を推進してまいります。

9) 効率的な新規及び老朽更新の設備投資

策定済の老朽更新計画を着実に進めると同時に新規案件の優先順を明確にし、適時適切な設備投資を計画的に行ってまいります。

10) 徹底した業務効率化と高度化

在宅勤務の推進と並行してRPAの推進・ワークフローシステム化など事務作業の効率化を推進しておりますがそれにより、改善業務に充当する比率を高め、収益基盤の確立を図ってまいります。

11) 将来を担う若手社員の確保とその育成

30歳代以下の社員が少ないことから、2020年度以降積極的に新卒や若手を中心とした中途採用を進めてきております。採用活動を一層強化するとともに、若手・中堅社員への教育を充実させてまいります。

12) 女性活躍の推進

2021年度新入社員として、12名中4名の女性社員を採用しましたが、今後とも積極的に女性社員の獲得に努めてまいります。また、2021年4月に当社初の女性部長が誕生し人事部長として活躍しております。社外取締役への女性起用も視野に入れつつ、広く女性活躍の推進に注力してまいります。

13) E S G 経営の推進とサステナビリティへの取り組み

E S G に関わる取り組みとして、世界34か国で活動する水・衛生専門の国際NGO「ウォーターエイド」に対し、ダクタイル鉄管の販売本数に応じた寄付を2021年度より開始しました。鑄鉄管を購入いただいた顧客の皆様にも、間接的に参画していただくことでSDGsへの貢献の輪を広げてまいります。

地元や市民の皆様にも自然と親しみ笑顔を届けられる活動として、久喜工場近隣の久喜菖蒲公園において、“Nature Play Carnival in Kuki”と称する地域貢献のイベントを2021年11月より開始し、毎月開催しております。

また、これらの活動に関わる情報をより広くステークホルダーの皆様にお届けするためのPR、IR活動強化を引き続き進めてまいります。

14) PR・IRの強化

2020年に開設しましたnoteや2021年5月にリニューアルいたしましたコーポレートサイトなどを最大限活用したPR活動や2021年3月より開始しこれまで3回実施してまいりました個人投資家様向け説明会などを通じ、さまざまなステークホルダーの皆様との双方向のコミュニケーションを行うことで、一層の企業活動の充実に努めてまいります。

以上の課題にスピード感をもって取り組み、お客様はじめさまざまなステークホルダーの皆様の期待に沿うよう、引き続き収益改善に向けて打てる手は全て打ち、収益力の強化を図ってまいります。

経営環境の変化に耐え得る財務体力の強化

2019年度に連結での実質借入金がゼロになりました。引き続き必要なあらゆる収益改善施策を迅速に実行し、着実な業績の向上、更なる財務体質強化を図ってまいります。

今後とも株主の皆様の一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

(1) 原材料の価格変動リスク

当社は主たる商品を素材から製造しており、原材料の製造原価に占める割合は約5割となっております。銅屑、コークス及び石油関連製品の購入価格が国際市況の影響を受け大幅に変動する場合があります。従って、原材料価格の変動は当社の業績を大きく左右する要因となっております。

(2) 市場リスク

当社グループが取り扱う商品の多くは、地方自治体等の公共事業向けとなるため、各年度の公共事業予算に依存しております。従って、公共事業予算が大きく変動した場合、国内需要及び市況価格が変動し、当社グループの売上高及び業績に大きな影響を与える可能性があります。

(3) 貸倒損失の発生リスク

当社は、鑄鉄管等の上下水道用資機材を主に各地域の特約店を経由して配管工事業者等に販売しております。当社の販売先である特約店については、各社の規模、財務状況等を精査し与信額を決定しておりますが、予期せぬ原因で特約店向けの債権の回収が困難になるリスクがあります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 経営成績

2021年度は、世界的な脱炭素に向けた動きにより、製鉄においてCO₂排出量が少ないとされる鋼屑需要の高まりやエネルギー価格の上昇による原材料価格等の高騰が、収益面に大きな影響を与えました。ロシアのウクライナ侵攻やCOVID-19変異株など不安定・不確実な状況が続く中、当社に与える影響を最小化すべく取り組んでおります。一方、COVID-19の社会影響が長期化するなかで政府要請がなされている「安定的な水の供給」や「うがい・手洗いの励行」、また自然災害の増大や国土インフラの老朽化による大規模断水により水道の重要性が再認識されているものの、当業界に大きな影響が及ぶには至らず、需要は全体としては概ね横這いとなりました。そうした中、当社はシナジーを期待する新規・周辺事業の拡販等を図りつつあるものの、諸物価高騰分の主要商品への販売価格への転嫁にタイムラグが生じていることから、対前年度増収減益となりました。

2021年度は、「水が途切れない世界を実現する」という当社のパーパスを新たに制定し、「管路分野のInnovative All in ワンストップ企業」への歩みを進めて参りました。公共インフラに関するシビックテックとしてWhole Earth Foundationとともに手掛けている「鉄とコンクリートの守り人（マンホール聖戦）」に関しては、8月の渋谷区を皮切りとして全国へ展開を進めているところであります。公共インフラである水道マンホールの維持保全のための画像・位置情報をスマートフォン上でのゲームアプリにより収集する先進性や、コンペ型撮影イベントを通じて地域住民である家族や友人同士で参加できる娯楽性が話題を呼び、当社久喜工場においてテレビ番組の報道取材を受けた他、多数のメディアにて紹介されました。加賀市・三島市といった地方開催の実施により、郷土への関与すなわちシビックプライドの意識向上に寄与する旨の参加者の声も頂いており、第一ステップとして順調に推移していると評価しております。

また、「管路分野のInnovative All in ワンストップ企業」に向け、設計から工事施工に至る通常のDB（デザイン アンド ビルド）方式については、ますます好評を得ているFracta社とのパートナーシップによるAI管路診断技術のソフト販売活動を組み入れた当社独自のDB（デザイン アンド ビルド）方式の活用、事業体ニーズをくみ取ったメンテナンス込みのDBM（デザイン アンド ビルド アンド メンテナンス）の売り込みを進めてきております。

開発新商品「楽ちゃく」は、これまで接合作業において作業負荷のかかっていた芯だし・接合が、サポートアームをワンタッチで取り付けただけで誰でも楽に簡単に出来、工事の安全性確保、作業環境改善や老若男女を問わない作業者の確保、作業人員の削減ならびに作業時間の半減を可能にした画期的な工具です。いくつかの現場での試行も経ましたので、営業販売に入って参ります。推進工法対応の「オセール」も、引き続き好評を得ており、さらなる拡販を試みております。

「管路分野のInnovative All in ワンストップ企業」を目指す取り組みは、このように順調に推移しており、2021年度はそうした活動を一層深化させ、昨年芽吹いた成果を着実に前進させる年となりました。

当連結会計年度の経営成績は以下のとおりとなっております。

売上高につきましては、原材料・燃料価格等の高騰により販売価格改定を進めてきたこと、グループ会社の売上が好調であったこと、シナジーを期待する新規・周辺事業の拡大等の成果などにより販売が順調に推移してきており、5億22百万円（前年同期比3.6%）増加し、151億85百万円となりました。

収益につきましては、原材料価格等の大幅な高騰に対する販売価格転嫁へのタイムラグを主要因として、減益となりました。原材料価格等の高騰対策については、自助努力だけでは吸収しきれず、やむを得ず、関係各位のご理解を得ながら、販売価格の改定を進めて参りました。これによる売上高の増加に加えてコスト削減による収益改善を実施したものの、販売価格改定にタイムラグが生じていることが影響したうえ、2022年1月に発生した塗料メーカーにおける品質上の不適切行為によって水道事業者が工事の停止や延期・キャンセルを行ったことで一時的に需要が落ち込み、営業利益は3億12百万円減少し3億83百万円、経常利益は3億13百万円減少し4億17百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は4億25百万円減少し2億36百万円の利益となりました。

引き続き、皆様のご期待に添えるような企業運営に努め、さらなる安定利益を確保するよう一層努力してまいりますので、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

当社ではESGやSDGsに関わる取り組みを積極的に行っております。2021年度は、国際NGO「ウォーターエイド」に対して、ダクティル鉄管の販売本数に応じた寄付を開始しはじめました。当社の鑄鉄管をご購入いただいた顧客の皆様間に間接的に参画いただけるよう貢献の輪を広げてきております。また、久喜工場近隣の久喜菖蒲公園にて、地域の皆様に自然と親しめるイベントを昨年11月より開始し、好評を得ながら毎月開催してきております。今後も、ESGやSDGsに関わる取り組みを積極的に進めて参ります。

また、当社はIR活動の一環として、株主の皆様をはじめとした投資家の皆様との対話を深めるために、昨年3月より開始した個人投資家様向け説明会を昨年9月、本年3月とこれまで計3回開催して参りました。参加者の皆様からいただいたいくつものご質問にお答えすることにより、双方向のコミュニケーションを図らせていただいております。今後も引き続き、さまざまなコミュニケーションツールを活用しながら、投資家の皆様との対話を通じたIR活動の推進を進めてまいります。

引き続き、株主の皆様をはじめステークホルダーの皆様のご期待に添えるよう、種々の経営施策を着実に実行し、さらなる安定利益を確保するよう努力して参りますので、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

セグメントの経営成績は、以下の通りであります。

ダクティル鑄鉄関連

当連結会計年度の売上高につきましては、原材料価格等の高騰により販売価格改定を進めてきたこと、シナジーを期待する新規・周辺事業拡大等の成果により販売が順調に推移していることにより、前年同期と比べ4億54百万円（前年同期比3.5%）増加し、133億42百万円となりました。

セグメント利益につきましては、原材料価格等の大幅な高騰の中、販売価格への転嫁にタイムラグが生じていることもあり、前年同期と比べ3億56百万円減少し、1億6百万円となりました。

樹脂管・ガス関連

当連結会計年度の売上高につきましては、子会社のリサイクル事業の売上が増加したことにより、前年同期と比べ67百万円（前年同期比3.8%）増加の18億43百万円となりました。

一方、セグメント利益につきましても、子会社のリサイクル事業の売上が増加したことにより、前年同期と比べ46百万円（前年同期比20.1%）増加し、2億78百万円となりました。

生産、受注及び販売の実績は、次のとおりであります。

生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	生産高(百万円)	前年同期比(%)
ダクティル鑄鉄関連	7,612	+2.7
樹脂管・ガス関連	661	10.3
合計	8,273	+1.5

- (注) 1. セグメント間取引はありません。
 2. 金額は販売価格を以って計上しております。

受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(百万円)	前年同期比(%)	受注残高(百万円)	前年同期比(%)
ダクティル鑄鉄関連	13,763	+4.0	2,464	+20.6
樹脂管・ガス関連	1,839	+3.4	3	52.3
合計	15,602	+4.0	2,468	+20.3

- (注) 1. セグメント間取引はありません。

販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	販売高(百万円)	前年同期比(%)
ダクティル鑄鉄関連	13,342	+3.5
樹脂管・ガス関連	1,843	+3.8
合計	15,185	+3.6

- (注) 1. セグメント間取引については、相殺消去しております。
 2. 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	販売高(百万円)	割合(%)	販売高(百万円)	割合(%)
太三機工(株)	2,368	16.2	2,375	15.6
東京瓦斯(株)	1,343	9.2	1,325	8.7

(2) 財政状態

当連結会計年度末の総資産は、177億80百万円と前連結会計年度末と比べ6億52百万円増加しました。

これは主に「現金及び預金」が5億66百万円減少したものの、営業債権が1億96百万円、有形固定資産の「機械装置及び運搬具（純額）」が1億1百万円、流動資産の「商品及び製品」が3億円、投資その他の資産の「投資有価証券」が2億84百万円増加したことによるものであります。

負債合計は、93億88百万円と前連結会計年度末と比べ5億52百万円増加しました。

これは主に営業債務が3億60百万円増加したことによるものであります。

純資産合計は、83億92百万円と前連結会計年度末と比べ1億円増加しました。

これは主に配当金の支払いによる減少(1億28百万円)があった一方で、「親会社株主に帰属する当期純利益」2億36百万円の計上等により「利益剰余金」が増加したことによるものであります。

(3) キャッシュ・フロー

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下、「資金」という。）は、31億11百万円と前連結会計年度末に比べて5億66百万円の減少となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動による資金の増加は、4億19百万円(前連結会計年度は10億40百万円の増加)となりました。

これは主に棚卸資産の増加額4億17百万円や法人税等の支払額1億58百万円があったものの、税金等調整前当期純利益4億30百万円、減価償却費3億26百万円、仕入債務の増加額3億91百万円等が、資金の支出を上回ったことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動による資金の減少は、8億2百万円(前連結会計年度は5億79百万円の減少)となりました。

これは主に有形固定資産の取得による支出4億69百万円、投資有価証券の取得による支出2億98百万円によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動による資金の減少は、1億83百万円(前連結会計年度は2億34百万円の減少)となりました。

これは主に配当金の支払による支出1億28百万円によるものであります。

(4) 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたって、資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす見積り及び仮定を用いておりますが、これらの見積り及び仮定に基づく数値は実際の結果と異なる可能性があります。

連結財務諸表の作成に当たって用いた会計上の見積り及び仮定のうち、重要なものは、連結財務諸表「注記事項（重要な会計上の見積り）」に記載しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

当社グループ（当社及び連結子会社）は、産業活動や日々の生活に欠かせない水・エネルギー・情報・通信などを輸送・供給するための各種管材料及びその他の商品を提供することにより、社会に貢献することを会社存立の基本理念としてまいりました。

そのなかで、技術対応として商品開発、施工技術の強化を行い、次世代を見据えた商品の育成を推進するとともに、外部各種団体の研究会に参加し、市場動向と研究開発の情報収集に努めてまいりました。製造部門においても、技術開発による生産性と品質の向上をはかり、収益の改善及び企業体質の強化を目指しております。

当連結会計年度におけるグループ全体の研究開発費は11百万円であり、各セグメント別の研究の目的、主要課題、研究成果は次のとおりであります。

（1）ダクタイル鑄鉄関連

水道用ダクタイル鉄管の主力商品である耐震管につきましては、長寿命が期待できるGX形を積極的に販売しており、これら耐震管の施工性向上を目的とした開発に注力致しました。

その中で、昨年度の非開削工事用推力伝達リング（商品名：オセール）の開発・拡充に続き、本年度は開削工法用接合工具（商品名：楽ちゃく）の開発に成功しました。これは、多くの施工現場の状況確認およびヒヤリング結果を基に、材料準備から管接合までの各プロセスの効率化を行い、作業時間の大幅な短縮が可能となりました。さらに、電動化された接合や管上部からのクリーンで安心・確実な作業ができることから、老若男女問わず簡単に接合作業ができることが実証されております。

当連結会計年度におけるダクタイル鑄鉄関連に係る研究開発費は11百万円であります。

（2）樹脂管・ガス関連

当連結会計年度における樹脂管・ガス関連に係る研究開発費の発生はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資については、生産の合理化及び設備の更新に重点を置き、設備投資を行っております。
なお、有形固定資産のほか、無形固定資産への投資も含めて記載しております。

当連結会計年度の設備投資の総額は621百万円であり、セグメントごとの設備投資について示すと、次のとおりであります。

(1) ダクティル鑄鉄関連

提出会社において、KATANAバルブに関する業務提携における特許権等で総額571百万円の設備投資を行いました。

なお、重要な設備の除却または売却はありません。

(2) 樹脂管・ガス関連

子会社において、倉庫庇工事等で総額50百万円の設備投資を行いました。

なお、重要な設備の除却または売却はありません。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2022年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
			建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積 千㎡)	その他	合計	
日本鑄鉄管株式会社 本社他 (東京都中央区他)	ダクティル 鑄鉄関連、 樹脂管・ ガス関連	本社設備、 事務所設備	10		()	17	28	49
久喜工場 (埼玉県久喜市)	ダクティル 鑄鉄関連	鑄鉄管、 鉄蓋生産 設備	160	600	2,208 (115) [19]	152	3,120	222
鉄蓋精整工場 (埼玉県久喜市)	ダクティル 鑄鉄関連、 樹脂管・ ガス関連	鉄蓋精整 設備、 レジンコン クリート製 品生産設備	0	10	99 (3)	0	111	5
樹脂管工場 (埼玉県久喜市)	樹脂管・ ガス関連	樹脂管 生産設備	37	16	345 (8)	1	401	6
高崎工場 (群馬県佐波郡玉村町)	ダクティル 鑄鉄関連 樹脂管・ ガス関連	異形管、 鉄蓋等 製造設備	36	145	583 (9)	4	770	18

(2) 国内子会社

2022年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
				建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積 千㎡)	その他	合計	
日鑄商事 株式会社	本社他 (埼玉県戸田市 他)	ダクティル 鑄鉄関連、 樹脂管・ ガス関連	リース資産 (車両)等	10		() [2]	34	45	43
株式会社 イガラシ	本社 (埼玉県 さいたま市 緑区)	ダクティル 鑄鉄関連	事務所、作 業場設備等	8	0	() [1]	10	18	9
株式会社 鶴見工材 センター	本社 (神奈川県 横浜市 鶴見区)	樹脂管・ ガス関連	倉庫設備	126	1	() [18]	6	134	16
日鑄サー ビス 株式会社	本社 (神奈川県 横浜市 鶴見区)	樹脂管・ ガス関連	事務所、作 業場設備、 マグネット ユニボ等	79	7	() [1]	2	89	11

- (注) 1. 現在休止中の主要な設備はありません。
 2. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品、リース資産、建設仮勘定の合計であります。
 3. 提出会社においては、土地及び建物の一部を賃借しております。年間賃借料は91百万円であります。また、土地及び建物の一部を賃貸しております。年間賃貸料は31百万円であります。なお、賃借している土地の面積については、[] で外書きしております。

4. 主要な設備のうち連結会社以外から賃借している主な設備内容は、下記のとおりであります。

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	台数	リース 期間	年間 リース料 (百万円)	リース契約 残高 (百万円)
日本鑄鉄管株式 会社工場 (埼玉県久喜市他)	ダクティル 鑄鉄関連、 樹脂管・ ガス関連	フォークリフト	7台	5年	12	45

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設

重要な設備の新設等の計画はありません。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	12,800,000
計	12,800,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2022年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2022年6月22日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	3,293,074	3,293,074	東京証券取引所 市場第一部(事業年度末現在) スタンダード市場(提出日現在)	単元株式数は100株 であります。
計	3,293,074	3,293,074		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2018年10月1日(注)	29,637	3,293		1,855		264

(注) 2018年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行い、発行済株式総数は29,637千株減少しております。

(5) 【所有者別状況】

2022年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)		13	26	35	18	1	2,998	3,091	
所有株式数(単元)		3,367	529	14,023	210	1	14,747	32,877	5,374
所有株式数の割合(%)		10.241	1.609	42.652	0.638	0.003	44.855	100.0	

(注) 1. 自己株式79,965株は、「個人その他」に799単元、「単元未満株式の状況」に65株含まれております。
2. 上記「その他の法人」には、証券保管振替機構名義の株式が1単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2022年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
JFEスチール株式会社	東京都千代田区内幸町2丁目2番3号	960	29.88
東京瓦斯株式会社	東京都港区海岸1丁目5-20	333	10.37
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	238	7.42
松原明男	千葉県東金市	63	1.97
渡邊倉庫株式会社	東京都港区港南1丁目8-15	60	1.87
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-12	36	1.12
株式会社みずほ銀行(常任代理人 株式会社日本カストディ銀行)	東京都千代田区大手町1丁目5-5(東京都中央区晴海1丁目8-12)	27	0.85
日本鑄鉄管従業員持株会	埼玉県久喜市菖蒲町昭和沼1番地	27	0.84
村瀬充	北海道函館市	20	0.63
井野傳次	埼玉県久喜市	16	0.51
計		1,781	55.45

(注) 上記の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は、次のとおりであります。

日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	238	千株
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	36	"

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2022年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 79,900		
完全議決権株式(その他)	普通株式 3,207,800	32,078	単元株式数は100株であります。
単元未満株式	普通株式 5,374		
発行済株式総数	3,293,074		
総株主の議決権		32,078	

(注) 1. 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が100株(議決権1個)含まれております。

2. 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式65株が含まれております。

【自己株式等】

2022年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 日本鑄鉄管株式会社	東京都中央区築地一丁目12番22号	79,900		79,900	2.4
計		79,900		79,900	2.4

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(百万円)
当事業年度における取得自己株式	66	0
当期間における取得自己株式		

(注) 当期間における取得自己株式には、2022年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (千円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他()				
保有自己株式数	79,965		79,965	

(注) 当期間における保有自己株式数には、2022年6月1日から有価証券報告書提出日まで単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、上下水道・ガス事業といった公共インフラを対象とした事業展開をしており、「あたりまえ」を継続的にお届けすることを会社の使命としていることから、長期的かつ安定的な経営基盤の確立を重要視しております。一方、将来にわたるさらなる収益力確保に向けて、管路DB方式による工事部門への進出等周辺事業への展開や新商品開発といった「管路分野のInnovative All in ワンストップ企業」の実現のための資金投下も考慮に入れた上での株主各位への安定的な配当維持を基本方針としております。

この基本方針に則り、2021年度第1四半期決算発表の際には、その時点の業績予想を踏まえ、配当予想を1株あたり20円としておりましたが、今般、2022年3月期の業績（親会社株主に帰属する当期純利益2億36百万円）が得られたことを踏まえ、従来から指針としております30%程度の配当性向から算定し、期末配当を1株当たり22円といたします（配当性向29.9%）。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2022年6月21日 定時株主総会決議	70	22.00

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、「コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方」として、法令の遵守に基づく公正な企業活動を基本に据え、経営の健全性と透明性を高めることを企業統治の要とし、事業経営の有効性と効率性の向上に努めるとともに、コーポレート・ガバナンスのさらなる充実に向けて「CSR会議」の設置その他の様々な取り組みを行っております。

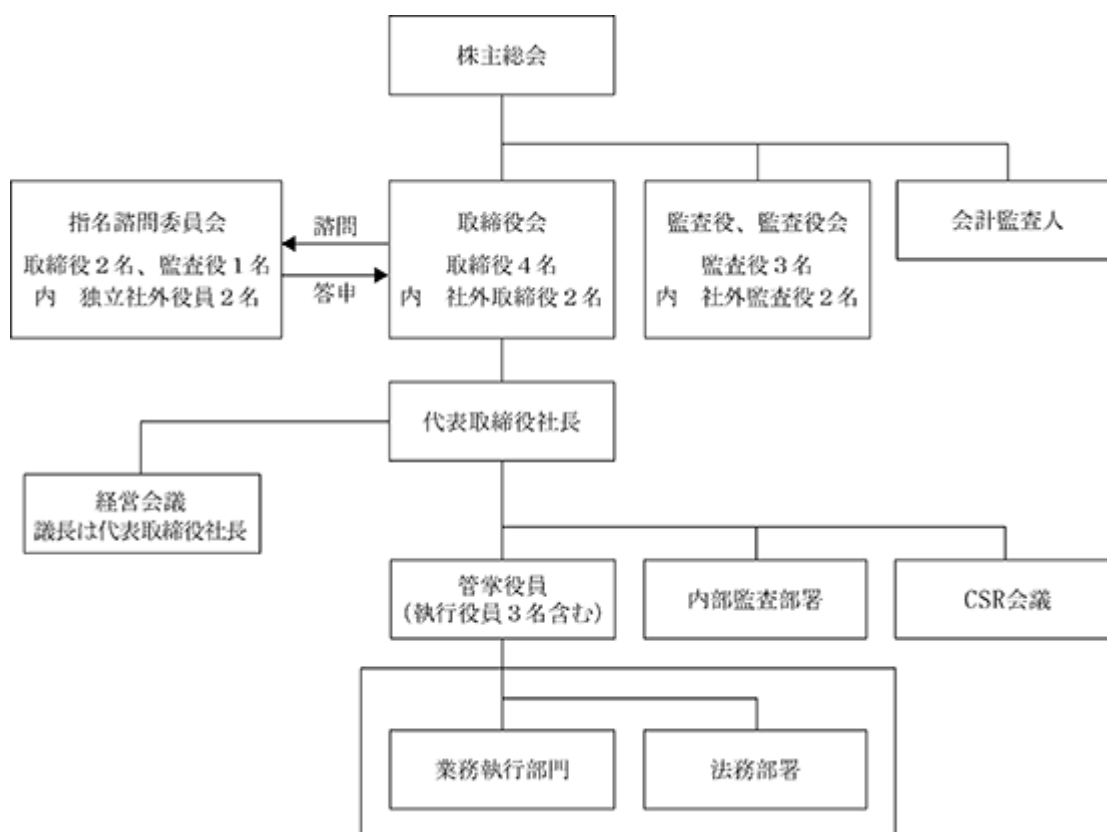
企業理念並びに定款、取締役会規則などをはじめとする、業務遂行にかかわるすべての規程・規則が遵守されるようはかるとともに、企業活動にかかわる法令変更または社会環境の変化に従い諸規程・規則について適宜見直しを行うことしております。

業務執行は、各部門の業務規程等に則り行われており、業務執行の適正性と財務報告の正確性を確保しております。

子会社の業務の適正性については、「グループ会社管理規程」に基づき、子会社の管理担当部署を定めるとともに、一定の重要事項について事前承認を行い、事業報告の定期的な報告や重要事項の発生または発生するおそれのある場合の報告を受けるなど、当社のリスク管理の一環として、一致協力して取り組んでおります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

業務の意思決定・執行及び監督について、リスク管理、コンプライアンスの徹底及び内部統制の向上をはかるため、以下の体制を採用しております。(2022年6月22日現在)



(a) 企業統治の体制の概要

a. 取締役会

- (1) 取締役の定数につきましては、13名以内とする旨を定款に定めております。
- (2) 取締役の選任決議については、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行うこと及び累積投票によらない旨、定款に定めております。
- (3) 機動的な資本政策が遂行できることを目的として、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって、自己の株式を取得することができる旨、定款に定めております。
- (4) 株主への機動的な利益還元を行うため、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載または記録された株主または登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項の規定による剰余金の配当(中間配当)をすることができる旨、定款に定めております。

当社の取締役会は、代表取締役社長 日下 修一が議長を務めております。その他メンバーは取締役 大木 勝裕、社外取締役 奥村 一郎、社外取締役 山内 崇の取締役の4名(うち社外取締役2名)で構成されており、毎月の定例取締役会のほか、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。取締役会は、法令・定款に定められた事項のほか、取締役会規則に基づき重要事項を決議し、各取締役の業務執行の状況を監督しております。

取締役会には、すべての監査役が出席し、取締役の業務執行の状況を監視できる体制となっており、取締役会の意思決定及び取締役の業務執行状況、リスク認識を監視しております。

なお、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項の規定によるものとされる決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもってこれを行う旨、定款に定めております。

b. 指名諮問委員会

取締役会によるガバナンスを強化すべく、2021年10月から任意の委員会として指名諮問委員会を設置いたしました。指名諮問委員会は、社外取締役 奥村 一郎を議長とし、取締役 大木勝裕、社外監査役 宇田 育を構成員としており、概ね年間4回程度開催し、取締役候補者の指名等について議論を行っております。

c. 監査役会

当社は、監査役制度を採用し監査役会を設置しております。監査役 高舘 健二、社外監査役 宇田 育、社外監査役 野神 光弘の常勤監査役1名及び非常勤監査役2名で構成されており、うち2名が社外監査役であります。監査役会は、毎月の定例監査役会のほか、必要に応じて臨時監査役会を開催しております。監査役は、取締役会のほか、経営会議等の重要な会議に出席し、必要に応じて意見陳述を行う等、常に取締役の業務執行を監視できる体制となっております。

d. 経営会議

経営会議は、代表取締役社長 日下 修一が議長を務めております。その他メンバーは取締役 大木 勝裕、常勤監査役 高舘 健二、執行役員企画部長 小倉 健次、執行役員商品技術センター長 清水 孝、執行役員工場長 渡邊 恭二、ダクティル営業本部長 老田 尚弘、社長付建設業特命担当 高橋 光二、総務部長 服部 匡成、経理部長 岩下 誠治、社長付 橋本謙治、子会社代表取締役社長 森泉 均、財務部長 塩田 浩平、副工場長 飯野 栄樹、堀井 隆宏並びに笠原 信一、人事部長 猪由美子、商品開発部長 松島誠二で構成されており、必要に応じてその他関係者が出席しております。

経営会議は、原則として毎月1回開催し、取締役会から委託された事項(会社法の定める取締役会専決事項を除く。)の意思決定のほか、経営上の重要事項及び月次予算の進捗状況の報告について審議等を行い、経営活動の効率化を図っております。

e. C S R会議

コーポレート・ガバナンスをより充実し全社横断的なリスク管理を行うため、C S R会議規程に基づき、社長を議長としたC S R会議を設置しており、原則として3ヶ月に1回開催し、問題点の把握・共有化とリスクの重要性、緊急性に応じた管理・対応を行っております。

f. 監査室

監査室は、監査室長 小笠原 大介が社長（代表取締役）の承認を得た監査実施計画に基づき、グループ会社を含む各部門の業務活動に関して、運営状況、業務実施の有効性及び正確性、コンプライアンスの遵守状況等についての監査を定期的に行い、代表取締役社長に報告しております。

また、内部監査結果及び是正状況については、監査役に報告し、意見交換を行っております。

(b) 当該企業統治の体制を採用する理由

当社は、監査役制度を採用し監査役会を設置しております。この体制により、経営の最高意思決定機関である取締役会に業務執行の権限及び責任を集中させ、業務執行及び取締役会から独立した監査役及び監査役会に取締役会に対する監査機能を担わせることで、適切な経営の意思決定と業務執行を実現するとともに組織的に十分牽制の効く体制であると考えております。

企業統治に関するその他の事項

(a) 内部統制システムの整備の状況（内部統制システム整備の基本方針）

a. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) すべての役員及び使用人は、グループ企業倫理規程の「法令の遵守はもちろんのこと広く企業倫理一般について高い意識を持ち社会から信頼される存在であり続けるよう努める。」とする行動目標に基づき、かつ、同規程の「法令の遵守及び公正な取引の遵守等」を骨格とした行動規準に従い、会社の経営及び業務を遂行する。
- (2) 定時株主総会終了直後、遵法経営を確認する意味において、「法令・定款及び総会決議を遵守し、善管注意義務及び忠実義務を誠実に履行する。」等を認めた確約書を、取締役は取締役会に、監査役は監査役会に提出する。また、年度末においては、取締役及び監査役は、確約書の履行状況を自ら確認する。
- (3) 社外役員として取締役2名及び監査役2名がおり、取締役会においてはライン業務等から離れた客観的な立場から意見の表明を行う。
- (4) 総務部は、法務の相談窓口として日常的な法務の相談受付及びその処理を行うとともに、必要に応じて法務マニュアルの作成・配付や取締役及び使用人の社内教育等を行う。
- (5) 内部監査部署として社長直属の監査室を置く。同室は、取締役及び使用人の職務の執行を監査し、その結果を社長及び監査役に報告する。
- (6) 社長直属のC S R推進室を置き、全社のコンプライアンス、安全・防災、環境、品質に関する執行状況を取締役及び監査役に報告する。
- (7) 報告相談窓口（グループ企業倫理ホットライン）を設置しており、法令、定款若しくは社内諸規程違反行為又は企業倫理上問題のある行為を早期に発見し、その解決に取組むとともに、監査役に対して内容を報告する。これによるグループ企業倫理ホットラインへの通報・相談者及び監査役への報告者に対して不当な取り扱いを受けないことを確保する。
- (8) 上場企業に要請されている財務報告の信頼性及情報開示の適正性・迅速性を確保するための体制整備と運用を図る。

b. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

(1) 取締役の職務の執行に係る以下の文書及びその関連資料は、文書管理規程に基づき保存、管理する。

株主総会議事録

取締役会議事録

経営会議議事録

決裁書

その他取締役の職務執行に係る重要な文書

(2) 前号の文書は、取締役又は監査役から閲覧の要請があった場合において、速やかに閲覧が可能となる場所にて保管する。

(b) リスク管理体制の状況

(1) 当社の事業を取巻くリスクには大小諸々あるが、その管理は、グループ会社管理規程及び各部門が該当する業務管理規程等に基づき、当該部門担当取締役の指導の下に行う。また、当該部門担当取締役は、発生の予見されるリスク及び発生したリスクの対応について取締役会に報告する。

(2) グループ横断的なリスク管理を行うため、CSR会議規程に基づき、社長を議長としたCSR会議を設置しており、問題点の把握・共有化とリスクの重要性、緊急性に応じた管理・対応を行う。

(3) 監査室は、各部門のリスク管理状況を監査し、その結果を社長及び監査役に報告する。

(c) 子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

(1) 当社の連結対象子会社は4社（以下「子会社」という。）あるが、いずれも会社法上の大会社には該当しない小規模な会社であることから、子会社の自主性は尊重しつつ、基本的には当社の管理、監督の下に経営を行わせる。

(2) グループ企業倫理規程に基づき、子会社の役員及び使用人の行動目標と行動規準等を定め、グループ会社の遵法経営を当社と一体として推進する。また、当社のリスク管理の一環として、子会社のリスク管理を、子会社と一致協力して取り組む。

(3) 当社グループの個別の事業活動については、当社が策定した経営方針・経営計画を周知徹底し、子会社の権限と責任を明確にした上で、子会社が各事業の業界特性等を踏まえた自主的な経営を行う。

(4) 当社の取締役又は使用人を直属子会社の取締役に派遣し、子会社の経営状況を的確に把握するとともに、子会社取締役の業務執行を監督する。なお、子会社ごとに担当取締役を定め、当該取締役は必要の都度担当子会社の経営状況等について取締役会に報告する。また、当社の常勤監査役又は使用人を直属子会社の監査役として派遣するとともに、子会社監査役として業務監査を行う。

(5) グループ会社管理規程に基づき、子会社の管理担当部署を定めるとともに、当社は、一定の重要事項について事前承認を行い、事業報告の定期的な報告や経営上影響の大きな重要事項が発生し又は発生するおそれのある場合の報告を受ける。

(6) 総務部は、子会社の日常的な法務の相談受付及びその指導等を行うとともに、必要に応じて法務マニュアルの作成・配付や子会社取締役及び使用人の教育等を行う。また、経理部は、子会社の経理業務に関し必要な指導、支援を行う。

(7) グループ企業倫理ホットラインを設置しており、子会社における法令、定款若しくは社内諸規程違反行為又は企業倫理上問題のある行為の早期発見、解決に取組むとともに、監査役に対して内容を報告する。これによるグループ企業倫理ホットラインへの通報・相談者および監査役への報告者に対して不当な取り扱いを受けないことを確保する。

(d) 取締役及び監査役の責任免除

取締役及び監査役が期待される役割を十分に発揮できることを目的として、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議によって、同法第423条第1項の取締役及び監査役（取締役及び監査役であった者を含む）の責任を法令の限度において免除することができる旨、定款に定めております。

(e) 責任限定契約の内容の概要

当社は、社外取締役及び社外監査役と会社法第427条第1項の規定により、同法第423条第1項の賠償責任を限定する契約を締結しております。なお、当該契約に基づく賠償の限度額は100万円または法令が規定する最低限度額のいずれか高い額であります。

以上は積極的な経営による企業価値の向上と、社外の有能な人材の確保を目的としたものであります。

(f) 補償契約の内容の概要

当社は、取締役および監査役の全員との間で、会社法第430条の2第1項に規定する補償契約を締結しております。また2022年4月1日就任の執行役員も締結対象としております。当該補償契約では、同項第1号の費用および同項第2号の損失を法令の定める範囲内において当社が補償することとしております。

また、補償の要否およびその範囲等について、職務の適正性が損なわれないようにするための措置として、以下4点の対応を取ることにしております。

- (1) 「防御費用」における「補償の要否及びその範囲の判断並びに前項の返還の要否の判断」、「損失」における「和解の同意、補償の要否及びその範囲の判断」はいずれも社外取締役又は外部の弁護士その他の専門家によって構成され、取締役会決議により設置された補償委員会が行うこと
- (2) 対象を公的判断が介在しているときに限定すること
- (3) 和解について事前同意を必要とすること
- (4) 損害軽減義務を履行しない場合は対象としないこと

(g) 役員等賠償責任保険契約の状況

- (1) 当社は会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険（以下、「D&O保険」といいます。）契約を保険会社との間で締結しており、これにより、取締役等が業務に起因して損害賠償責任を負った場合における損害（ただし、保険契約上で定められた免責事由に該当するものを除きます。）等を補填することとしております。なお、D&O保険の保険料は、全額を当社が負担しております。
- (2) 被保険者の範囲は、当社の会社法上の取締役および監査役並びに子会社であります日鑄商事(株)、(株)鶴見工材センター、日鑄サービス(株)の会社法上の取締役および監査役です。また、2022年4月1日就任の執行役員も締結対象としております。
- (3) D&O保険の契約期間は、1年間であり、当該期間の満了前に取締役会において決議の上、これを更新する予定であります。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性7名 女性 名 (役員のうち女性の比率 %)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役 社長執行役員	日下 修一	1958年3月23日	1981年4月 2008年4月 2010年10月 2013年4月 2016年4月 2018年4月 2018年6月	日本鋼管(株)入社 (現JFEスチール(株)) JFEスチール(株)知多製造所製造部長 同社知多製造所企画部長 同社常務執行役員 同社専務執行役員 当社常勤顧問 当社代表取締役社長就任(現)	(注)4	4,000
取締役執行役員 ガス営業 本部長	大木 勝裕	1960年4月12日	1983年4月 2006年4月 2008年4月 2013年4月 2016年6月 2018年4月 2018年4月 2018年4月 2018年6月	東京瓦斯(株)入社 同社都市リビング事業部 内管企画グループマネージャー 同社導管内管保安グループマネージャー 同社設備保安部長 鷲宮ガス(株)取締役 当社ガス営業本部長就任(現) (株)鶴見工材センター代表取締役社長(現) 日鑄サービス(株)代表取締役社長(現) 当社取締役就任(現)	(注)4	2,100
取締役	奥村 一郎	1956年2月11日	1980年4月 2001年4月 2004年7月 2008年3月 2008年6月 2014年4月 2017年4月 2018年4月 2018年6月 2020年6月	川崎製鉄(株)入社 (現JFEスチール(株)) 川鉄シビル(株) (現JFEシビル(株)) 出向、 経営企画部企画・審査室副部長 同社海外事業部海外建設部長 兼 橋梁・土木事業部橋梁・土木工事部長 JFEシビル(株)移籍 同社取締役(2013年4月～2017年3月 JFE シビル(株)フィリピン現地法人社長兼務) 同社常務取締役 同社常務執行役員 同社顧問 (株)リンコーコーポレーション監査役(現) 当社取締役就任(現)	(注)4	
取締役	山内 崇	1969年6月13日	1993年4月 2011年4月 2014年4月 2016年4月 2019年4月 2021年4月 2022年6月	川崎製鉄(株)入社 (現JFEスチール(株)) 同社東日本製鉄所(千葉地区)製鋼部製鋼工場長 同社経営企画部企画室主任部員兼ジェイエフイーホールディングス(株)企画部主任部員 同社西日本製鉄所(倉敷地区)製鋼部製鋼技術室長兼同社西日本製鉄所企画部企画室主任部員 同社東日本製鉄所工程部計画室長 同社東日本製鉄所(千葉地区)製鋼部長(現) 当社取締役就任(現)	(注)4	

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役 (常勤)	高 館 健 二	1962年11月6日	1986年4月 日本鋼管(株)入社 (現JFEスチール(株)) 2010年7月 JFEスチール(株)監査部主任部員(副部長) 2011年6月 同社監査役事務局主任部員(副部長) 2015年4月 同社監査役事務局主任部員(部長) 2016年4月 水島合金鉄(株)監査役(現JFEミネラル(株)) 2016年4月 ガルバテックス(株)監査役 2016年4月 JFEウエストテクノロジー(株)監査役 2017年4月 JFE精密(株)監査役 2018年4月 当社監査室付(部長) 2018年6月 当社常勤監査役就任(現)	(注)7	500
監査役	宇 田 斉	1959年7月7日	1982年4月 日本鋼管(株)入社 (現JFEエンジニアリング(株)) 2004年4月 JFEエンジニアリング(株)大阪支社和歌山営業所長 2005年4月 同社大阪支社鋼構造営業部長 2009年4月 同社鋼構造本部橋梁事業部橋梁営業部長 2011年4月 同社鋼構造本部橋梁事業部営業部長 2017年4月 日本エンジニアリング(株)代表取締役社長 2019年3月 福山ガス(株)社外取締役(現) 2019年6月 ジェコス(株) 社外監査役(現) JFEシステムズ(株) 社外監査役(現) 2020年6月 当社監査役就任(現)	(注)5	
監査役	野神 光弘	1962年12月19日	1985年7月 日本鋼管(株)入社 (現JFEスチール(株)) 2010年4月 JFEスチール(株)厚板・形鋼輸出部厚板・軌条室長 2011年10月 ジェイ エフ イー ホールディングス(株)企画部主任部員 2014年4月 JFEスチール(株)経営企画部海外事業総括室主任部員 2018年4月 同社監査役事務局部長 2018年6月 日本鑄造(株)監査役 2021年4月 ジェイ エフ イー ホールディングス(株)監査役事務局主任部員 2021年6月 ジェイ エフ イー ホールディングス(株)監査役事務局部長(現) 2021年6月 当社監査役就任(現)	(注)6	
計					6,600

- (注) 1. 取締役 奥村 一郎、山内 崇の両氏は、社外取締役であります。
2. 監査役 宇田 斉、野神 光弘の両氏は、社外監査役であります。
3. 取締役 奥村 一郎及び監査役 宇田 斉の両氏は、株式会社東京証券取引所が一般株主保護のため確保を義務付けている独立役員であります。
4. 取締役の任期は、2022年3月期に係る定時株主総会終結の時から2024年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
5. 監査役の任期は、2020年3月期に係る定時株主総会終結の時から2024年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
6. 監査役の任期は、2021年3月期に係る定時株主総会終結の時から2025年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
7. 監査役の任期は、2022年3月期に係る定時株主総会終結の時から2026年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
8. 当社では、経営の意思決定・監督機能と業務執行機能との分離により経営効率の向上を推進し、権限を移譲することで業務執行の迅速化、効率化を図るために、執行役員制度を導入しております。執行役員は5名で、代表取締役社長 日下 修一、取締役 大木 勝裕、企画部長 小倉 健次、商品技術センター長 清水 孝、工場長 渡邊 恭二で構成されております。

社外役員の状況

- 提出会社の社外取締役及び社外監査役の員数

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

2022年6月22日現在

役名	氏名	重要な兼職の状況
取締役	奥村 一郎	(株)リンコーコーポレーション監査役
取締役	山内 崇	JFEスチール(株)東日本製鉄所(千葉地区)製鋼部長
監査役	宇田 斉	福山ガス(株)社外取締役、ジェコス(株)社外監査役、JFEシステムズ(株)社外監査役
監査役	野神 光弘	ジェイ エフ イーホールディングス株式会社 監査役事務局部長

- 社外取締役及び社外監査役の人的・資本的・取引関係その他の利害関係

JFEスチール株式会社は2022年3月末において当社の議決権を29.9%所有しており、当社と同社の間には、第1[企業の概況]3[事業の内容]に記載のとおり営業取引がございますが、これは通常の取引であり、社外取締役個人が直接利害関係を有するものではありません。

ジェイ エフ イー ホールディングス株式会社はJFEスチール株式会社の完全親会社(純粋持株会社)になりますが、社外監査役と当社との取引関係等の利害関係はありません。

- 社外取締役又は社外監査役が提出会社の企業統治において果たす機能及び役割

奥村 一郎、山内 崇の両氏には、これまで培ってきた豊富な業務経験と知識を活かして、客観的な観点から当社の経営全般に亘り必要な助言をいただくことを期待して社外取締役として招聘いたしました。また、宇田 斉、野神 光弘の両氏は経営の客観性や中立性の重視の観点から社外監査役に選任いたしました。

社外取締役及び社外監査役と当社間に特別な利害関係はありません。

- 社外取締役又は社外監査役の選任状況に関する提出会社の考え方

社外取締役及び社外監査役は、出席した取締役会において独立した立場で適宜発言を行うことで企業統治において重要な役割を果たしており、選任状況は適切であります。当社においては、社外取締役を選任するための会社からの独立性を定めており、東京証券取引所が定める「独立性基準」を満たすことに加え、様々な分野での豊富な経験と優れた見識、専門性の高い知識を有し、一般株主と利益相反が生じる恐れのない独立した中立的な立場の者を選任する方針であります。

なお、東京証券取引所が定める独立役員の要件を満たす取締役 奥村 一郎及び監査役 宇田 斉の両氏を独立役員に指定しております。

- 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、取締役会において必要な情報収集を行い、経営者としての経験から適宜質問を行い、意見交換を行う等連携をはかっております。

社外監査役は、取締役会や監査役会においてその専門的見地からの報告や発言を適宜行っており、監査役監査においてはその独立性、中立性、専門性を十分に発揮し、監査を実施するとともに、内部監査室、他の監査役及び会計監査人と連携をはかり情報収集や意見交換を行っております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役会は、社外監査役2名を含む監査役3名で構成しております。常勤監査役の監査活動は、監査役会が定めた監査の方針・計画等に依り行われており、監査役会は原則として毎月定例の監査役会を開催する他、必要に応じて臨時監査役会を開催することとしております。各監査役は取締役会に出席するほか、常勤監査役と他の監査役との間で職務を分担して経営会議・CSR会議その他重要会議に出席していますが、当事業年度は対面又はオンライン形式での出席となりました。また、代表取締役社長と定期的に意見交換会を開催する他、電話回線又はインターネット等を経由した手段も活用しながら取締役等から業務報告を聴取し、棚卸等の立会や事業所等への往査を行うことで取締役の職務の執行を監査しております。また、会計監査人から適宜報告を受けるほか、会計監査人の品質管理体制について説明を受けその妥当性を確認しております。

常勤監査役は内部監査部門とも適宜会合を持ち、内部監査の実施状況や監査結果の報告等を聴取するとともに、意見交換を行っております。また、常勤監査役は直屬子会社3社の監査役を兼務しており、当該子会社の取締役会及びその他の重要会議へ出席する他、業務報告の聴取や財産状況の調査等により取締役の職務の執行を監査しております。

なお、常勤監査役である高館 健二氏は日本鋼管株式会社において経理業務に従事していた経験があり、またJFEスチール株式会社において多くの関連会社の監査役を務めていた経験があることから、財務及び会計に相当程度の知見を有しております。

当事業年度において当社は監査役会を合計13回開催しており、個々の監査役の出席状況については次のとおりです。また、監査役会における主な検討事項は、監査方針および監査計画、内部統制体制の整備・運用状況、会計監査人の監査の方法および結果の相当性、会計監査人の選任及び解任並びに不再任に関する事項、会計監査人に対する報酬等の同意、監査報告書の作成等です。

役職名	氏名	開催回数	出席回数
監査役（常勤）	高館 健二	13	13
監査役	松井 毅浩	3	3
監査役	宇田 斉	13	13
監査役	野神 光弘	10	10

内部監査の状況

内部監査部署として社長（代表取締役）直屬の監査室が設けられており、要員は3名（2022年6月22日現在）であります。

監査室は、社長（代表取締役）から指示された監査テーマにつき、社長（代表取締役）の承認を得た監査実施計画に基づき、業務監査を実行するとともに、取締役及び使用人の職務の執行を監査し、その結果を社長及び監査役等に報告しております。

また、監査室は、内部統制監査の結果について会計監査人及び監査役に報告する等、相互に連携することにより、会計監査人及び監査役が当社の内部統制に関する理解を深め、より効率的、効果的な監査が行われるよう努めております。

会計監査の状況

a. 業務を執行した公認会計士の氏名及び所属する監査法人

公認会計士の氏名等		所属する監査法人
業務執行社員	稲吉 崇	EY新日本有限責任監査法人
	澤部 直彦	

b. 継続監査期間

2010年以降。

c. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士	3名
その他	14名

d. 監査法人の選定方針と理由

監査法人を選定するにあたっては、下記の項目について問題がないことを確認する方針としております。

- (a) 会計監査人の解任事由の有無 ()
- (b) 会計監査人の監査の方法と結果の相当性
- (c) 会計監査人の品質管理体制
- (d) 監査報酬の水準

会計監査人の解任または不再任の決定の方針

当社では、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合には監査役会が検討のうえ、監査役全員の同意によって会計監査人を解任いたします。また、上記に準ずる場合、その他必要があると監査役会が判断した場合は、会計監査人の解任または不再任を株主総会の目的といたします。

上記方針に基づきEY新日本有限責任監査法人に対して評価を行った結果、EY新日本有限責任監査法人は当社の会計監査人として職責を果たしていると判断したことから、当該法人を当社第119期事業年度に係る会計監査人として再任することといたしました。

e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役および監査役会は、EY新日本有限責任監査法人に対して評価を行っております。監査役および監査役会は、会計監査人の職務遂行状況、監査体制、監査報酬水準等が適切であるかについて、会計監査人からの報告聴取、監査への立会いおよび経営執行部門との意見交換等を通じて確認を行いました。その結果、監査の方法と結果は相当であること、監査の品質管理体制、監査報酬の水準に関して問題のないことから、EY新日本有限責任監査法人は当社の会計監査人として職責を果たしていると評価いたしました。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	28	10	30	
連結子会社				
計	28	10	30	

前連結会計年度における当社の非監査業務の内容は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属している EY トランザクション・アドバイザー・サービス株式会社に対して、公認会計士法第2条第1項に定める業務以外の業務として依頼した財務及び税務に関する調査費用であります。

b. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

前連結会計年度

該当事項はありません。

当連結会計年度

該当事項はありません。

c. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、前事業年度の監査実績の相当性、当事業年度の監査計画の内容および報酬額の妥当性等を検討した結果、会計監査人の報酬等に同意いたしました。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

a．取締役の個人別の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

年間報酬額については、株主総会で決議された報酬総額の範囲内において、個人ごとの担当職務、各期の業績、貢献度等を総合的に勘案して決定いたします。退職慰労金の額については、役職、在任期間を勘案して決定いたします。

b．取締役の個人別の報酬等の額に対する割合の決定に関する方針

個人別の報酬を全額金銭で支給いたします。

c．取締役に報酬等を与える時期の決定に関する方針

年間報酬額については、月額に均等割した額を毎月支給いたします。

退職慰労金については、退職時に支給いたします。

d．取締役の個人別の報酬等の内容についての決定の委任に関する事項

(a)取締役会はその決定にもとづき、代表取締役日下修一に(b)の権限を委任しております。

(b)委任する権限の内容

年間報酬額を株主総会で決議された報酬総額の範囲内において、個人ごとの担当職務、各期の業績、貢献度等を総合的に勘案して決定する権限、退職慰労金の額を役職、在任期間を勘案して決定する権限を、それぞれ委任しております。

(c)権限が適切に行使されるようにするための措置の内容

委任する者及びその内容が適切であることを、取締役会が確認したうえで委任を決議いたします。

(d)上記 d (a) ~ (c) の方針に従って権限を委任した理由

取締役会の指名による代表取締役として責任をもって業務を執行する過程で事業運営の実態及び取締役の個人別の寄与度等を総合的にかつ最も適切に判断できる者と判断して権限を委任しております。

e．今事業年度に係る取締役の個人別の報酬等の内容が決定の方針に沿うものであると取締役会が判断した理由

取締役会から正当に委任された者より、決定の方針にもとづいて事業運営の実態及び取締役の個人別の寄与度等を適切に反映して決定したという報告を確認することにより、内容は決定の方針に沿うものであると判断しました。

(注) 取締役の報酬決定方針(上記 a ~ d) につきましては、2021年2月22日に開催されました取締役会において決議する方法により決定しました。

提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の金額(百万円)			対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動 報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	55	49		6	3
監査役 (社外監査役を除く。)	15	14		1	1
社外役員	7	7			4

提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、純投資目的以外の目的である投資株式について、当該株式が安定的な取引関係の構築の維持・強化に資すると判断した場合を除き、今後売却を検討していく方針です。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、保有先企業の財政状態、経営成績及び株価、配当等の状況を確認しており、最終的にはその株式を管理する各担当部門が取引関係等の事情も考慮しながら、毎年、取締役会において、保有目的が適切か、保有に伴う便益やリスクが資本コストに見合っているか等を検証し、保有に適さないと判断した株式については、順次縮減してまいります。

b．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	4	48
非上場株式以外の株式	2	33

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式		
非上場株式以外の株式	1	18

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)みずほフィナンシャルグループ	20,600	20,600	取引関係等の円滑化のため	無
	32	32		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	1,560	1,560	取引関係等の円滑化のため	無
	1	0		
ジェイ エフ イー ホールディングス(株)		9,969	当事業年度末日において保 有していません。	無
		13		

(注)「 」は、当該銘柄を保有していないことを示しております。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
東京瓦斯(株)	255,000	255,000	従業員の退職一時金の原資 として信託拠出しており、 当社が議決権行使の指図権 限を有している。	有
	569	627		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	183,000	183,000	従業員の退職一時金の原資 として信託拠出しており、 当社が議決権行使の指図権 限を有している。	無
	139	108		

(注) 1. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していません。

2. みなし保有株式は、退職給付信託として信託設定したものであり、当社の貸借対照表には計上されておられません。なお、みなし保有株式の「貸借対照表計上額(百万円)」欄には、事業年度末日におけるみなし保有株式の時価に議決権行使権限の対象となる株式数を乗じて得た額を記載しております。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2021年4月1日から2022年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2021年4月1日から2022年3月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組を行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、連結財務諸表等を適正に作成できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、監査法人等が主催する研修会への参加並びに会計専門書の定期購読を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,678	3,111
受取手形及び売掛金	3,616	-
受取手形	-	908
電子記録債権	1,334	1,959
売掛金	-	2,279
商品及び製品	2,264	2,565
仕掛品	513	536
原材料及び貯蔵品	529	624
その他	114	121
貸倒引当金	47	49
流動資産合計	12,004	12,057
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	4,848	4,940
減価償却累計額	4,418	4,469
建物及び構築物(純額)	429	471
機械装置及び運搬具	16,326	16,457
減価償却累計額	15,647	15,675
機械装置及び運搬具(純額)	679	781
工具、器具及び備品	2,866	2,962
減価償却累計額	2,761	2,827
工具、器具及び備品(純額)	104	134
土地	3,237	3,237
リース資産	149	147
減価償却累計額	55	54
リース資産(純額)	93	92
建設仮勘定	6	4
有形固定資産合計	*1 4,551	*1 4,722
無形固定資産	128	243
投資その他の資産		
投資有価証券	96	380
破産更生債権等	8	8
退職給付に係る資産	211	228
繰延税金資産	64	70
その他	70	78
貸倒引当金	9	8
投資その他の資産合計	442	757
固定資産合計	5,123	5,722
資産合計	17,127	17,780

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	1,757	2,013
電子記録債務	1,344	1,449
短期借入金	*1 3,050	*1 1,050
未払法人税等	96	107
賞与引当金	165	160
その他	779	851
流動負債合計	7,192	5,632
固定負債		
長期借入金	-	*1 2,000
繰延税金負債	357	356
役員退職慰労引当金	23	31
退職給付に係る負債	761	814
負ののれん	31	26
その他	469	526
固定負債合計	1,643	3,755
負債合計	8,835	9,388
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,855	1,855
資本剰余金	264	264
利益剰余金	5,963	6,070
自己株式	105	105
株主資本合計	7,978	8,085
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	1	3
退職給付に係る調整累計額	22	3
その他の包括利益累計額合計	24	0
非支配株主持分	289	306
純資産合計	8,291	8,392
負債純資産合計	17,127	17,780

【連結損益及び包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
売上高	14,663	*1 15,185
売上原価	*3 11,797	*3 12,415
売上総利益	2,866	2,770
販売費及び一般管理費	*2,*3 2,170	*2,*3 2,387
営業利益	695	383
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	1	2
負ののれん償却額	5	5
貸倒引当金戻入額	3	1
仕入割引	7	7
受取賃貸料	9	9
作業くず売却益	7	12
その他	20	28
営業外収益合計	56	67
営業外費用		
支払利息	15	15
支払手数料	0	15
設備賃貸費用	2	2
自己株式取得費用	2	0
その他	0	0
営業外費用合計	21	33
経常利益	730	417
特別利益		
固定資産売却益	*4 0	*4 0
投資有価証券売却益	-	12
特別利益合計	0	13
特別損失		
固定資産除却損	*5 0	*5 0
固定資産売却損	*6 0	-
特別損失合計	0	0
税金等調整前当期純利益	730	430
法人税、住民税及び事業税	144	177
法人税等調整額	93	4
法人税等合計	50	173
当期純利益	679	257
(内訳)		
親会社株主に帰属する当期純利益	661	236
非支配株主に帰属する当期純利益	18	20
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	10	5
退職給付に係る調整額	227	18
その他の包括利益合計	*7 237	*7 24
包括利益	917	232
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	899	211
非支配株主に係る包括利益	18	20

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額			非支配株 主持分	純資産合 計
	資本金	資本剰余 金	利益剰余 金	自己株式	株主資本 合計	その他有 価証券 評価差額 金	退職給付 に係る 調整累計 額	その他の 包括利益 累計額合 計		
当期首残高	1,855	264	5,400	5	7,515	8	205	213	274	7,576
当期変動額										
剰余金の配当			98		98					98
親会社株主に帰属する 当期純利益			661		661					661
自己株式の取得				99	99					99
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）						10	227	237	14	252
当期変動額合計	-	-	562	99	462	10	227	237	14	715
当期末残高	1,855	264	5,963	105	7,978	1	22	24	289	8,291

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額			非支配株 主持分	純資産合 計
	資本金	資本剰余 金	利益剰余 金	自己株式	株主資本 合計	その他有 価証券 評価差額 金	退職給付 に係る 調整累計 額	その他の 包括利益 累計額合 計		
当期首残高	1,855	264	5,963	105	7,978	1	22	24	289	8,291
当期変動額										
剰余金の配当			128		128					128
親会社株主に帰属する 当期純利益			236		236					236
自己株式の取得				0	0					0
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）						5	18	24	16	7
当期変動額合計	-	-	107	0	107	5	18	24	16	100
当期末残高	1,855	264	6,070	105	8,085	3	3	0	306	8,392

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	730	430
減価償却費	252	326
負ののれん償却額	5	5
貸倒引当金の増減額(は減少)	1	1
賞与引当金の増減額(は減少)	28	4
退職給付費用	35	8
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	9	8
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	12	2
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	21	29
受取利息及び受取配当金	1	2
支払利息	15	15
固定資産除売却損益(は益)	0	0
売上債権の増減額(は増加)	231	196
棚卸資産の増減額(は増加)	217	417
破産更生債権等の増減額(は増加)	0	0
仕入債務の増減額(は減少)	34	391
投資有価証券売却損益(は益)	-	12
未払消費税等の増減額(は減少)	29	28
その他	6	2
小計	1,162	577
利息及び配当金の受取額	1	2
利息の支払額	15	15
法人税等の支払額	108	158
法人税等の還付額	-	12
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,040	419
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	477	469
有形固定資産の売却による収入	8	4
投資有価証券の取得による支出	-	298
投資有価証券の売却による収入	-	18
無形固定資産の取得による支出	110	58
その他	-	0
投資活動によるキャッシュ・フロー	579	802
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	-	2,000
自己株式の取得による支出	99	0
配当金の支払額	98	128
短期借入金の純増減額(は減少)	-	2,000
リース債務の返済による支出	31	35
非支配株主への配当金の支払額	4	4
その他	-	15
財務活動によるキャッシュ・フロー	234	183
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	226	566
現金及び現金同等物の期首残高	3,442	3,678
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	10	-
現金及び現金同等物の期末残高	* 3,678	* 3,111

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

すべての子会社を連結しております。

連結子会社の数

4社

連結子会社の名称

日鑄商事株式会社

株式会社鶴見工材センター

日鑄サービス株式会社

株式会社イガラシ

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社数

なし

(2) 持分法を適用した関連会社数

なし

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

a その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)を採用しております。

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法を採用しております。

棚卸資産

評価基準は原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)を採用しております。

a 商品及び製品

移動平均法を採用しております。

b 仕掛品

移動平均法を採用しております。

c 原材料及び貯蔵品

主に移動平均法を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

主に定額法を採用しております。ただし、連結子会社については一部を除いて定率法を採用しております。

なお、主な耐用年数は、次のとおりであります。

建物及び構築物	2～50年
機械装置及び運搬具	2～17年

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

なお、主な償却年数は次のとおりであります。

ソフトウェア（自社利用分）	5年（社内における利用可能期間）
特許権	8年

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零（残価保証のある場合は残価保証額）とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については、貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、翌期支給見込額のうち当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく当連結会計年度末要支給額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については期間定額基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の10年による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の10年による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社及び連結子会社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。

ダクタイル鑄鉄関連

ダクタイル鑄鉄関連においては、水道用ダクタイル鑄鉄管、水道用異形管、上下水道用F E M鉄蓋、水道用附属部品の製造販売を主要な事業として行っております。

水道用ダクタイル鑄鉄管等の製品の製造販売については、顧客との契約に基づく当該製品の引き渡しを履行義務として識別し、収益の認識時点については、顧客が製品を検収した時に資産の支配が顧客に移転するため当該時点で収益を認識することとしております。取引価格は、顧客への約束した財又はサービスの移転と交換に企業が権利を得ると見込んでいる対価の金額で測定しております。取引の対価は、履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

水道用ダクタイル鑄鉄管の販売においては、販売促進策として販売代理店、販売特約店等に対して販売数量に応じた販売奨励金の制度を設けていることから変動対価が含まれております。販売奨励金については売上高から直接減額して処理する方法によっております。

樹脂管・ガス関連

樹脂管・ガス関連においては、ガス用ダクタイル鑄鉄管、ガス用異形管、ガス用F E M鉄蓋、ガス用附属品、ポリエチレン管、レジンコンクリート製品の製造販売を主要な事業として行っております。

ガス用ダクタイル鑄鉄管等の樹脂管・ガス関連製品の製造販売については、顧客との契約に基づく当該製品の引き渡しを履行義務として識別し、収益の認識時点については、顧客が製品を検収した時に資産の支配が顧客に移転するため当該時点で収益を認識することとしております。取引価格は、顧客への約束した財又はサービスの移転と交換に企業が権利を得ると見込んでいる対価の金額で測定しております。取引の対価は、履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

その他

その他A I管路診断技術のソフト販売活動につきましては、契約に基づく各事業体様へのソフト並びソフトを用いた管路診断結果等の納品を履行義務として識別し、納品の完了をもって収益を認識しております。取引の対価は、履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

なお、当社がF r a c t a社の販売代理人として、事業体様と契約交渉等に当たる場合には、F r a c t a社により事業体様へソフト並びにソフトを用いた管路診断結果等が提供されるよう手配することが当社の履行義務であり、したがって代理人として取引を行っている判断しております。代理人取引については、契約により事業体様からF r a c t a社が受け取る金額から当社がF r a c t a社へ支払う額を控除した純額を収益として計上しております。

(6) のれんの償却方法及び償却期間

- ・のれんは、5年間で均等償却しております。
- ・2010年3月31日以前に発生した負ののれんの償却については、20年間で均等償却しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(重要な会計上の見積り)

繰延税金資産の回収可能性

(1)当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

繰延税金資産の金額は、連結財務諸表「注記事項(税効果会計関係)」の1.に記載の金額と同一であります。

(2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

会社及び子会社の繰延税金資産の回収可能性の評価にあたっては、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に従い、将来の税金負担を軽減する効果を有するかどうかで判断しており、会社においては、翌期の一時差異等加減算前課税所得の見積額に基づいて、翌期の一時差異等のスケジューリングの結果、将来減算一時差異及び繰越欠損金に対して翌期解消が見込まれる金額については繰延税金資産の回収可能性があるものとしております。

翌期の一時差異等加減算前課税所得の見積りにあたっては、将来の収益力に基づく課税所得の見積りとして、会社の将来の事業計画を基礎としており、当該事業計画作成上の重要な仮定は、予定販売単価及び見込販売量並びに見込原材料価格であります。

予定販売単価及び見込販売量の見積りにあたっては、原材料や物流費等の諸物価の動きに対応した販売価格の改善活動の実績の精査と主要分野であるダクタイル鑄鉄管市場の動向や各自治体の公共工事予算額の動向等を勘案しつつ、経営環境等の外部要因に関する情報や当社が用いている内部の情報(過去における売上計画の達成状況など)と総合的に修正見積っております。

また、見込原材料価格の見積りにあたっては、原料費のうち大きな割合を占める国内鉄スクラップ価格の趨勢や相場動向、中国等海外勢を含めた需給予測等一定の仮定に基づき見積りを行っております。

当該見積り及び当該仮定について、将来の不確実な経済条件の変動等により見直しが必要になった場合、翌連結会計年度の連結財務諸表において認識する繰延税金資産及び法人税等調整額の金額に重要な影響を与える可能性があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これにより、従来、販売費及び一般管理費として処理する方法によってまいりました販売奨励金については売上高から直接減額して処理する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

また、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、当連結会計年度より「受取手形」、「売掛金」にそれぞれ区分表示しております。ただし、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

この結果、従来の方と比べて、当連結会計年度の売上高は31百万円減少するとともに、販売費及び一般管理費が同額の31百万円減少しております。このため営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益に与える影響はありません。また、利益剰余金の期首残高に与える影響はありません。

なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度に係る「収益認識関係」注記については記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号2019年7月4日)第44 - 2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、連結財務諸表に与える影響はありません。

また、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うこととしました。ただし、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号2019年7月4日)第7 - 4項に定める経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前連結会計年度に係るものについては記載しておりません。

(追加情報)

(COVID-19の感染拡大の影響に関する会計上の見積り)

当社グループにおいては、COVID-19の拡大は、2022年3月期決算の繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りに影響を与えるほどの状況ではございませんでした。また、2023年3月期におきましても、COVID-19による事業活動の停止等の直接的な影響は生じておらず、今後もその状況に大幅な変化はないものと想定しております。

当社グループ(会社及び子会社)では、上記の仮定に基づき、繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りを適切に行っております。

(連結貸借対照表関係)

1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
建物及び構築物	99 百万円	113 百万円
機械装置及び運搬具	509 "	593 "
土地	935 "	935 "
計	1,544 百万円	1,642 百万円

担保付債務は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
短期借入金	1,100 百万円	450 百万円
長期借入金	- "	650 "
計	1,100 百万円	1,100 百万円
上記の資産に対する根抵当権限度額	10 百万円	10 百万円

2 保証債務

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
住宅財形融資制度に基づく従業員の銀行からの借入保証額	1 百万円	0 百万円

(連結損益及び包括利益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項 セグメント情報 3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報」に記載しております。

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
運送費	406 百万円	417 百万円
給料手当	672 "	735 "
賞与引当金繰入額	61 "	63 "
退職給付費用	29 "	30 "
貸倒引当金繰入額	1 "	2 "
役員退職慰労引当金繰入額	8 "	8 "
減価償却費	43 "	69 "

3 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
一般管理費	1 百万円	8 百万円
当期製造費用	2 "	2 "
計	3 百万円	11 百万円

4 固定資産売却益の主な内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
機械装置及び運搬具	0 百万円	0 百万円
工具、器具及び備品	0 "	- "

5 固定資産除却損の主な内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
建物及び構築物	0 百万円	0 百万円
機械装置及び運搬具	0 "	0 "
工具、器具及び備品	0 "	0 "

6 固定資産売却損の主な内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
建物及び構築物	0 百万円	- 百万円
土地	0 "	- "

7 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	14 百万円	4 百万円
組替調整額	- "	12 "
税効果調整前	14 百万円	7 百万円
税効果額	4 "	2 "
その他有価証券評価差額金	10 百万円	5 百万円
退職給付に係る調整額		
当期発生額	192 百万円	10 百万円
組替調整額	35 "	8 "
税効果調整前	227 百万円	18 百万円
税効果額	- "	- "
退職給付に係る調整額	227 百万円	18 百万円
その他の包括利益合計	237 百万円	24 百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	3,293,074	-	-	3,293,074

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	3,099	76,800	-	79,899

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

取締役会決議に基づく自己株式の買取りによる増加 76,800株

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2020年6月16日 定時株主総会	普通株式	98	30.00	2020年3月31日	2020年6月17日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年6月18日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	128	40.00	2021年3月31日	2021年6月21日

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（株）	3,293,074	-	-	3,293,074

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（株）	79,899	66	-	79,965

（変動事由の概要）

増加数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加 66株

3. 配当に関する事項

（1）配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり配当額 （円）	基準日	効力発生日
2021年6月18日 定時株主総会	普通株式	128	40.00	2021年3月31日	2021年6月21日

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額 （円）	基準日	効力発生日
2022年6月21日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	70	22.00	2022年3月31日	2022年6月22日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 （自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）	当連結会計年度 （自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）
現金及び預金	3,678 百万円	3,111 百万円
現金及び現金同等物	3,678 百万円	3,111 百万円

(リース取引関係)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(借主側)

(1) リース資産の内容

・有形固定資産

主として、フォークリフト(機械装置及び運搬具)であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行等金融機関からの借入れによっております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形、売掛金及び電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されております。投資有価証券は、主に取引先企業との業務に関連する株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形、買掛金及び電子記録債務は、1年以内の支払期日であります。借入金は、主に設備投資に必要な資金調達を目的としたものであり、このうち一部は、変動金利であるため金利の変動リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

営業債権である受取手形及び売掛金に係る顧客の信用リスクは、取引先ごとに期日及び残高を管理するとともに、与信管理規程等に沿って財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減をはかっております。

市場リスクの管理

投資有価証券については、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況等の把握を行っております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

適時に資金繰計画を作成し、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度（2021年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 投資有価証券 その他有価証券	47	47	-
資産計	47	47	-
(1) 長期借入金	-	-	-
負債計	-	-	-

(*1)現金は注記を省略しており、「預金」、「受取手形及び売掛金」、「電子記録債権」、「支払手形及び買掛金」、「電子記録債務」、「短期借入金」は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(*2)時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：百万円)

区分	2021年3月31日
非上場株式	48

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(1)投資有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度（2022年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 投資有価証券 その他有価証券	331	331	-
資産計	331	331	-
(1) 長期借入金	2,000	1,999	0
負債計	2,000	1,999	0

(*1)現金は注記を省略しており、「預金」、「受取手形」、「売掛金」、「電子記録債権」、「支払手形及び買掛金」、「電子記録債務」、「短期借入金」は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(*2)市場価格のない株式等は、「(1)投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	2022年3月31日
非上場株式	48

(注1) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2021年3月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	3,678
受取手形及び売掛金	3,616
電子記録債権	1,334

当連結会計年度(2022年3月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	3,111
受取手形	908
売掛金	2,279
電子記録債権	1,959

(注2) 長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(リース債務の返還予定額には残価保証額は含めておりません。)

前連結会計年度(2021年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	3,050	-	-	-	-	-
長期借入金	-	-	-	-	-	-
リース債務	32	25	23	16	7	-
合計	3,082	25	23	16	7	-

当連結会計年度(2022年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	1,050	-	-	-	-	-
長期借入金	-	-	-	-	2,000	-
リース債務	31	30	23	14	2	-
合計	1,081	30	23	14	2,002	-

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

当連結会計年度(2022年3月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
其他有価証券				
株式	33	-	-	33
社債	-	298	-	298
資産計	33	298	-	331
負債計	-	-	-	-

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

当連結会計年度(2022年3月31日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
資産計	-	-	-	-
長期借入金	-	1,999	-	1,999
負債計	-	1,999	-	1,999

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式及び社債は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。一方で、社債は、市場での取引頻度が低く、活発な市場における相場価格とは認められないため、その時価をレベル2の時価に分類しております。

長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2021年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	14	6	8
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	14	6	8
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	32	38	5
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	32	38	5
合計	47	45	2

当連結会計年度(2022年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	1	0	1
債券	-	-	-
その他	-	-	-
小計	1	0	1
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	32	38	6
債券	298	298	-
その他	-	-	-
小計	330	336	6
合計	331	336	5

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	18	12	-
合計	18	12	-

(デリバティブ取引関係)

当社グループは、デリバティブ取引を利用していないため該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付型の制度として、確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を設けております。なお、当社においては、退職給付信託を設定しております。

連結子会社の1社は退職一時金制度を設けており、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しており、また、一部の連結子会社は中小企業退職金共済制度(中退共)に加入しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
退職給付債務の期首残高	2,653	2,666
勤務費用	126	126
利息費用	9	9
数理計算上の差異の発生額	34	24
退職給付の支払額	86	95
その他	1	1
退職給付債務の期末残高	2,666	2,730

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
年金資産の期首残高	1,946	2,117
期待運用収益	15	16
数理計算上の差異の発生額	157	13
事業主からの拠出額	27	29
退職給付の支払額	29	33
年金資産の期末残高	2,117	2,144

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	2,666	2,730
年金資産	2,117	2,144
	549	586
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	549	586
退職給付に係る負債	761	814
退職給付に係る資産	211	228
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	549	586

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
勤務費用	126	126
利息費用	9	9
期待運用収益	15	16
数理計算上の差異の費用処理額	24	9
過去勤務費用の費用処理額	10	1
確定給付制度に係る退職給付費用	156	110

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (2022年 3月 31日)
過去勤務費用	10	1
数理計算上の差異	217	20
合計	227	18

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (2022年 3月 31日)
未認識過去勤務費用	3	2
未認識数理計算上の差異	26	6
合計	22	3

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (2022年 3月 31日)
債券	15%	15%
株式	65%	65%
生命保険一般勘定	19%	19%
その他	1%	1%
合計	100%	100%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度53%、当連結会計年度54%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	前連結会計年度 (2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (2022年 3月 31日)
割引率	0.4%	0.4%
長期期待運用収益率	0.8%	0.8%
予想昇給率	3.2% ~ 4.9%	3.2% ~ 4.9%

3. 確定拠出制度

連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は前連結会計年度 0百万円、当連結会計年度 0百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2021年 3月31日)	当連結会計年度 (2022年 3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金(注) 2	509 百万円	619 百万円
賞与引当金	56 "	54 "
貸倒引当金	18 "	18 "
未払事業税	10 "	16 "
棚卸資産評価損	21 "	30 "
役員退職慰労引当金	7 "	9 "
固定資産減損損失	705 "	588 "
資産除去債務	36 "	36 "
退職給付に係る負債	496 "	507 "
その他有価証券評価差額金	0 "	1 "
その他	63 "	76 "
繰延税金資産小計	1,924 百万円	1,960 百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注) 2	509 "	619 "
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	1,141 "	1,056 "
評価性引当額小計(注) 1	1,650 "	1,675 "
繰延税金資産合計	274 百万円	285 百万円
繰延税金負債		
買換資産圧縮積立金	256 百万円	256 百万円
退職給付信託設定益	160 "	160 "
退職給付に係る資産	64 "	69 "
土地評価益	85 "	85 "
繰延税金負債合計	567 百万円	571 百万円
繰延税金資産(負債)純額	292 百万円	285 百万円

(注) 1. 評価性引当額が24百万円増加しております。この主な内容は、減損損失の減価償却額に係る評価性引当額が117百万円減少し、他方、繰越欠損金に係る評価性引当額が109百万円増加したことに伴うものであります。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度(2021年 3月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)	-	-	-	-	-	509	509百万円
評価性引当額	-	-	-	-	-	509	509 "
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度(2022年 3月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(b)	-	-	-	-	35	583	619百万円
評価性引当額	-	-	-	-	35	583	619 "
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(b) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった
 主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.2%	30.2%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3%	0.7%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.2%	0.3%
住民税均等割	1.5%	2.7%
負ののれん償却額	0.2%	0.4%
法人税等還付額	0.7%	0.7%
子会社との税率差異	1.6%	5.0%
評価性引当額の増減額	26.1%	4.5%
その他	1.5%	1.5%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	7.9%	40.2%

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

当社保有の建物の一部についてはアスベストを含有した建材が使用されており、当該建物の使用期限を迎えた時点で除去する義務を有しているため、法令上の義務により資産除去債務を計上しております。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

負債計上した資産除去債務の金額の算定にあたっては、使用見込期間を7年～9年と見積り、割引率は0.583%～0.935%を使用しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
期首残高	123 百万円	120 百万円
資産除去債務の履行による減少額	3 "	- "
その他増減額(は減少)	- "	0 "
期末残高	120 百万円	121 百万円

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は、「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4. 会計方針に関する事項 (5) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりです。

3. 当連結会計年度末および翌連結会計年度以降の収益の金額を理解するための情報

(1) 顧客との契約から生じた債権の残高等

(単位:百万円)

	当連結会計年度	
	期首残高	期末残高
顧客との契約から生じた債権	4,951	5,147

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、当初の予想契約期間が1年を超える重要な取引がないため、実務上の便法を適用し、残存履行義務に関する情報の記載を省略しています。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、販売市場・顧客の種類・業界に特有の規制環境等の類似性を考慮し、事業活動を展開しております。

従って、当社は販売市場の類似性を基礎とした事業別セグメントから構成されており、「ダクタイル鑄鉄関連」及び「樹脂管・ガス関連」の2つを報告セグメントとしております。

「ダクタイル鑄鉄関連」は、水道用ダクタイル鑄鉄管、水道用異形管、上下水道用FEM鉄蓋、水道用付属部品の製造販売及び水道施設工事業、エンジニアリング事業を行っております。「樹脂管・ガス関連」は、ガス用ダクタイル鑄鉄管、ガス用異形管、ガス用FEM鉄蓋、ガス用付属部品、ポリエチレン管、レジンコンクリート製品の製造販売、ガス用配管材等の保管及び輸送、産業廃棄物の収集、運搬及び積み替え保管、古鉄類(金属、樹脂等)の販売を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益又は損失()は営業損益ベースの数値であります。セグメント間の取引は、会社間の取引であり、市場価格等に基づいております。

(会計方針の変更)に記載のとおり、当連結会計年度に係る連結財務諸表から収益認識会計基準等を適用し、収益認識に関する会計処理方法を変更したため、事業セグメントの利益又は損失の算定方法を同様に変更しております。

当該変更により、従来の方法に比べて、当連結会計年度のセグメントの売上高は、ダクタイル鑄鉄関連で31百万円減少しております。なお、セグメント利益への影響はございません。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			合計	調整額 (注)	連結財務諸表 計上額
	ダクト 管・ 鑄鉄 関連	樹脂管・ ガス 関連	計			
売上高						
外部顧客への売上高	12,887	1,775	14,663	14,663	-	14,663
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	41	41	41	41	-
計	12,887	1,817	14,704	14,704	41	14,663
セグメント利益	463	231	694	694	1	695
セグメント資産	11,954	2,000	13,955	13,955	3,172	17,127
その他の項目						
減価償却費	202	49	252	252	-	252
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	650	18	669	669	-	669

(注) 調整額は、以下のとおりです。

- セグメント利益の調整額1百万円は、セグメント間取引消去であります。
- セグメント資産の調整額3,172百万円の主なものは、当社での余資運用資金(現金及び預金)、長期投資資金(投資有価証券)に係る資産等であります。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			合計	調整額 (注)	連結財務諸表 計上額
	ダクト 管・ 鑄鉄 関連	樹脂管・ ガス 関連	計			
売上高						
顧客との契約から 生じる収益	13,342	1,843	15,185	15,185	-	15,185
外部顧客への売上高	13,342	1,843	15,185	15,185	-	15,185
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	79	79	79	79	-
計	13,342	1,922	15,265	15,265	79	15,185
セグメント利益	106	278	385	385	1	383
セグメント資産	12,911	1,798	14,710	14,710	3,069	17,780
その他の項目						
減価償却費	276	50	326	326	-	326
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	571	50	621	621	-	621

(注) 調整額は、以下のとおりです。

- セグメント利益の調整額1百万円は、セグメント間取引消去であります。
- セグメント資産の調整額3,069百万円の主なものは、当社での余資運用資金(現金及び預金)、長期投資資金(投資有価証券)に係る資産等であります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関連する主な報告セグメントの名称
太三機工(株)	2,368	ダクタイル鑄鉄関連
東京瓦斯(株)	1,343	樹脂管・ガス関連

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関連する主な報告セグメントの名称
太三機工(株)	2,375	ダクタイル鑄鉄関連
東京瓦斯(株)	1,325	樹脂管・ガス関連

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

2010年4月1日前行われた企業結合等により発生した負ののれんの償却額及び未償却残高は、以下のとおりであります。

（単位：百万円）

	報告セグメント			合計
	ダクタイル鑄鉄関連	樹脂管・ガス関連	計	
当期償却額	5	-	5	5
当期末残高	31	-	31	31

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

2010年4月1日前行われた企業結合等により発生した負ののれんの償却額及び未償却残高は、以下のとおりであります。

（単位：百万円）

	報告セグメント			合計
	ダクタイル鑄鉄関連	樹脂管・ガス関連	計	
当期償却額	5	-	5	5
当期末残高	26	-	26	26

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等に限る。）等

前連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
主要株主 会社等	東京瓦斯㈱	東京都 港区	141,844	ガスの製造・供給及び販売等	(被所有) 直接 10.4	製品の売上、ガス用配管材等保管の受注先	製品の売上、ガス用配管材等保管の受注先	1,343	売掛金	123

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

独立第三者間取引と同様の一般的な取引条件で行っております。

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
主要株主 会社等	東京瓦斯㈱	東京都 港区	141,844	ガスの製造・供給及び販売等	(被所有) 直接 10.4	製品の売上、ガス用配管材等保管の受注先	製品の売上、ガス用配管材等保管の受注先	1,325	売掛金	138

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

独立第三者間取引と同様の一般的な取引条件で行っております。

(イ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

重要な影響を及ぼす取引がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

重要な影響を及ぼす取引がないため、記載を省略しております。

(1 株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
1 株当たり純資産額	2,490.51 円	2,516.47 円
1 株当たり当期純利益	202.90 円	73.52 円

(注) 1. 潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していません。

2. 1 株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	661	236
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	661	236
普通株式の期中平均株式数(千株)	3,259	3,213

3. 1 株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (2022年 3月 31日)
純資産の部の合計額(百万円)	8,291	8,392
純資産の部の合計額から控除する金額 (百万円)	289	306
(うち非支配株主持分(百万円))	(289)	(306)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	8,002	8,085
1 株当たり純資産額の算定に用いられた期 末の普通株式の数(千株)	3,213	3,213

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	1,050	1,050	0.5	
1年以内に返済予定の長期借入金	2,000	-	-	
1年以内に返済予定のリース債務	32	31	-	
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	2,000	0.4	2026年6月30日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	72	70	-	2023年4月30日～ 2026年11月30日
合計	3,154	3,152	-	

- (注) 1. 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2. リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、「平均利率」を記載しておりません。
 3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額は以下のとおりであります。なお、リース債務の返還予定額には残価保証額は含まれておりません。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	-	-	-	2,000
リース債務	30	23	14	2

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2)【その他】

1. 連結会計年度終了後の状況

特記事項はありません。

2. 当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	3,664	7,681	12,061	15,185
税金等調整前 四半期(当期)純利益 (百万円)	116	241	423	430
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益 (百万円)	58	128	262	236
1株当たり四半期(当期) 純利益 (円)	18.09	40.11	81.73	73.52

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は 1株当たり四半期純損失() (円)	18.09	22.02	41.61	8.21

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,773	1,419
受取手形	838	442
電子記録債権	1,089	1,599
売掛金	*1 2,432	*1 2,278
製品	2,177	2,449
仕掛品	513	536
原材料及び貯蔵品	533	631
その他	*1 79	*1 85
貸倒引当金	27	29
流動資産合計	9,409	9,414
固定資産		
有形固定資産		
建物	166	196
構築物	38	49
機械及び装置	662	761
車両運搬具	7	11
工具、器具及び備品	89	121
土地	3,237	3,237
リース資産	49	51
建設仮勘定	4	4
有形固定資産合計	*2 4,257	*2 4,433
無形固定資産		
特許権	-	140
ソフトウェア	107	82
その他	2	2
無形固定資産合計	109	226
投資その他の資産		
投資有価証券	96	380
関係会社株式	76	76
その他	130	146
貸倒引当金	0	0
投資その他の資産合計	302	602
固定資産合計	4,669	5,262
資産合計	14,079	14,676

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	65	52
電子記録債務	1,344	1,449
買掛金	*1 494	*1 560
短期借入金	*2 3,050	*2 1,050
未払金	350	423
未払法人税等	14	-
関係会社預り金	160	510
賞与引当金	151	144
その他	*1 265	*1 228
流動負債合計	5,895	4,419
固定負債		
長期借入金	-	*2 2,000
繰延税金負債	357	356
退職給付引当金	629	655
役員退職慰労引当金	19	27
負ののれん	31	26
長期未払金	-	55
その他	439	440
固定負債合計	1,478	3,560
負債合計	7,374	7,979
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,855	1,855
資本剰余金		
資本準備金	264	264
資本剰余金合計	264	264
利益剰余金		
利益準備金	463	463
その他利益剰余金		
買換資産圧縮積立金	592	590
別途積立金	5,362	5,362
繰越利益剰余金	1,730	1,731
利益剰余金合計	4,688	4,685
自己株式	105	105
株主資本合計	6,703	6,700
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	1	3
評価・換算差額等合計	1	3
純資産合計	6,705	6,696
負債純資産合計	14,079	14,676

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
売上高	*1 9,787	*1 9,906
売上原価	*1 7,850	*1 8,266
売上総利益	1,937	1,639
販売費及び一般管理費	*1,*2 1,581	*1,*2 1,739
営業利益又は営業損失()	356	100
営業外収益		
受取利息	*1 0	*1 0
受取配当金	*1 72	*1 190
受取賃貸料	*1 10	*1 10
作業くず売却益	7	12
その他	*1 31	*1 39
営業外収益合計	122	252
営業外費用		
支払利息	*1 15	*1 16
支払手数料	0	15
自己株式取得費用	2	0
その他	0	0
営業外費用合計	18	31
経常利益	459	120
特別利益		
固定資産売却益	0	0
投資有価証券売却益	-	12
特別利益合計	0	12
特別損失		
固定資産除却損	0	0
固定資産売却損	0	-
特別損失合計	0	0
税引前当期純利益	459	133
法人税、住民税及び事業税	17	6
法人税等調整額	88	1
法人税等合計	70	7
当期純利益	530	125

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金			
				買換資産 圧縮積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	1,855	264	264	463	594	5,362	2,163	4,256
当期変動額								
剰余金の配当							98	98
当期純利益							530	530
買換資産圧縮積立金の取崩					1		1	-
自己株式の取得								
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	-	-	1	-	433	431
当期末残高	1,855	264	264	463	592	5,362	1,730	4,688

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	5	6,371	8	8	6,363
当期変動額					
剰余金の配当		98			98
当期純利益		530			530
買換資産圧縮積立金の取崩		-			-
自己株式の取得	99	99			99
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			10	10	10
当期変動額合計	99	331	10	10	341
当期末残高	105	6,703	1	1	6,705

当事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金			
				買換資産 圧縮積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	1,855	264	264	463	592	5,362	1,730	4,688
当期変動額								
剰余金の配当							128	128
当期純利益							125	125
買換資産圧縮積立金の取崩					1		1	-
自己株式の取得								
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	-	-	1	-	1	2
当期末残高	1,855	264	264	463	590	5,362	1,731	4,685

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	105	6,703	1	1	6,705
当期変動額					
剰余金の配当		128			128
当期純利益		125			125
買換資産圧縮積立金の取崩		-			-
自己株式の取得	0	0			0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			5	5	5
当期変動額合計	0	2	5	5	8
当期末残高	105	6,700	3	3	6,696

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)を採用しております。

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法を採用しております。

2. 棚卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)を採用しております。

(1) 原材料及び貯蔵品

移動平均法を採用しております。

(2) 製品・仕掛品

移動平均法を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は、次のとおりであります。

建物 2～45年

機械及び装置 2～10年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、主な償却年数は次のとおりであります。

ソフトウェア(自社利用分) 5年 (社内における利用可能期間)

特許権 8年

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零(残価保証のある場合は残価保証額)とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については、貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、翌期支給見込額のうち当事業年度に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。なお、当事業年度末において認識すべき年金資産が、退職給付債務から数理計算上の差異等を控除した額を超過する場合には、前払年金費用として投資その他の資産に計上しております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の10年による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の10年による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日次事業年度から費用処理しております。

(4) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく当事業年度末要支給額を計上しております。

5. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。

ダクタイル鑄鉄関連

ダクタイル鑄鉄関連においては、水道用ダクタイル鑄鉄管、水道用異形管、上下水道用FEM鉄蓋、水道用附属部品の製造販売を主要な事業として行っております。

水道用ダクタイル鑄鉄管等の製品の製造販売については、顧客との契約に基づく当該製品の引き渡しを履行義務として識別し、収益の認識時点については、顧客が製品を検収した時に資産の支配が顧客に移転するため当該時点で収益を認識することとしております。取引価格は、顧客への約束した財又はサービスの移転と交換に企業が権利を得ると見込んでいる対価の金額で測定しております。取引の対価は、履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

水道用ダクタイル鑄鉄管の販売においては、販売促進策として販売代理店、販売特約店等に対して販売数量に応じた販売奨励金の制度を設けていることから変動対価が含まれております。販売奨励金については売上高から直接減額して処理する方法によっております。

樹脂管・ガス関連

樹脂管・ガス関連においては、ガス用ダクタイル鑄鉄管、ガス用異形管、ガス用FEM鉄蓋、ガス用附属品、ポリエチレン管、レジンコンクリート製品の製造販売を主要な事業として行っております。

ガス用ダクタイル鑄鉄管等の樹脂管・ガス関連製品の製造販売については、顧客との契約に基づく当該製品の引き渡しを履行義務として識別し、収益の認識時点については、顧客が製品を検収した時に資産の支配が顧客に移転するため当該時点で収益を認識することとしております。取引価格は、顧客への約束した財又はサービスの移転と交換に企業が権利を得ると見込んでいる対価の金額で測定しております。取引の対価は、履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

その他

その他A I管路診断技術のソフト販売活動につきましては、契約に基づく各事業体様へのソフト並びソフトを用いた管路診断結果等の納品を履行義務として識別し、納品の完了をもって収益を認識しております。取引の対価は、履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

なお、当社がFracta社の販売代理人として、事業体様と契約交渉等に当たる場合には、Fracta社

により事業体様へソフト並びにソフトを用いた管路診断結果等が提供されるよう手配することが当社の履行義務であり、したがって代理人として取引を行っていると判断しております。代理人取引については、契約により事業体様からFracta社が受け取る金額から当社がFracta社へ支払う額を控除した純額を収益として計上しております。

6. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 負ののれんの償却に関する事項

2010年3月31日以前に発生した負ののれんの償却については、20年間で均等償却しております。

(重要な会計上の見積り)

繰延税金資産の回収可能性

(1)当事業年度の財務諸表に計上した金額

繰延税金資産の金額は、財務諸表「注記事項(税効果会計関係)」の1.に記載の金額と同一であります。

(2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項(重要な会計上の見積り)」の(2)に記載した内容と同一であります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これにより、従来、販売費及び一般管理費として処理する方法によってまいりました販売奨励金については売上高から直接減額して処理する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の繰越利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、従来の方と比べて、当事業年度の売上高は47百万円減少するとともに、販売費及び一般管理費が同額の47百万円減少しております。このため営業損益、経常利益及び税引前当期純利益に与える影響はありません。また、繰越利益剰余金の期首残高に与える影響はありません。

なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度に係る「収益認識関係」注記については記載していません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、財務諸表に与える影響はありません。

(表示方法の変更)

(損益計算書関係)

前事業年度において「営業外費用」の「その他」に含めておりました「支払手数料」(前事業年度0百万円)については、重要性が高まったため、当事業年度においては区分掲記しております。

(追加情報)

(COVID-19の感染拡大の影響に関する会計上の見積り)

当社においては、COVID-19の拡大は、2022年3月期決算の繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りに影響を与えるほどの状況ではございませんでした。また、2023年3月期におきましても、COVID-19による事業活動の停止等の直接的な影響は生じておらず、今後もその状況に大幅な変化はないものと想定しております。

当社では、上記の仮定に基づき、繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りを適切に行っております。

(貸借対照表関係)

1 関係会社に対する資産及び負債

区分表示されたもの以外で当該関係会社に対する金銭債権又は金銭債務の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
短期金銭債権	1,627 百万円	1,469 百万円
短期金銭債務	31 "	32 "

2 担保に供している資産及び担保付債務は次のとおりであります。

短期借入金450百万円及び長期借入金650百万円の担保として、根抵当権限度額(10百万円)に供しているものは、次のとおりであります。

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
建物	99 百万円	113 百万円
機械及び装置	509 "	593 "
土地	935 "	935 "
計	1,544 百万円	1,642 百万円

3 保証債務

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
住宅財形融資制度に基づく従業員の銀行からの借入保証額	1 百万円	0 百万円

(損益計算書関係)

1 関係会社との営業取引及び営業取引以外の取引の取引高の総額

	前事業年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	2,909 百万円	2,754 百万円
仕入高	124 "	254 "
営業取引以外の取引による取引高	184 "	363 "

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
運送費	386 百万円	396 百万円
給料手当	376 "	436 "
賞与引当金繰入額	47 "	48 "
退職給付費用	21 "	23 "
貸倒引当金繰入額	1 "	1 "
役員退職慰労引当金繰入額	7 "	7 "
減価償却費	18 "	43 "
おおよその割合		
販売費	54 %	48 %
一般管理費	46 "	52 "

(有価証券関係)

前事業年度(2021年3月31日)

子会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式の時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりであります。

区分	前事業年度 (百万円)
子会社株式	76

当事業年度(2022年3月31日)

子会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりであります。

区分	当事業年度 (百万円)
子会社株式	76

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金(注) 2	506 百万円	619 百万円
賞与引当金	45 "	43 "
貸倒引当金	8 "	8 "
未払事業税	3 "	7 "
棚卸資産評価損	20 "	29 "
役員退職慰労引当金	5 "	8 "
固定資産減損損失	705 "	588 "
資産除去債務	36 "	36 "
退職給付引当金	436 "	436 "
その他有価証券評価差額金	0 "	1 "
その他	26 "	36 "
繰延税金資産小計	1,795 百万円	1,817 百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注) 2	506 "	619 "
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	1,143 "	1,051 "
評価性引当額小計(注) 1	1,649 "	1,671 "
繰延税金資産合計	145 百万円	146 百万円
繰延税金負債		
買換資産圧縮積立金	256 百万円	256 百万円
退職給付信託設定益	160 "	160 "
土地評価益	85 "	85 "
繰延税金負債合計	502 百万円	502 百万円
繰延税金資産(負債)純額	357 百万円	356 百万円

(注) 1. 評価性引当額が21百万円増加しております。この主な内容は、減損損失の減価償却額に係る評価性引当額が117百万円減少し、他方、繰越欠損金に係る評価性引当額が112百万円増加したことに伴うものであります。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前事業年度(2021年3月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)	-	-	-	-	-	506	506百万円
評価性引当額	-	-	-	-	-	506	506 "
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当事業年度(2022年3月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(b)	-	-	-	-	35	583	619百万円
評価性引当額	-	-	-	-	35	583	619 "
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(b) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.2%	30.2%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3%	1.3%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	4.9%	43.7%
住民税均等割	2.0%	7.1%
負ののれん償却額	0.3%	1.2%
法人税等還付額	1.1%	2.3%
評価性引当額の増減額	42.4%	15.8%
その他	0.8%	1.5%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	15.3%	5.7%

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	166	47	0	17	196	3,282
	構築物	38	16	-	5	49	705
	機械及び装置	662	226	3	124	761	15,501
	車両運搬具	7	7	0	3	11	82
	工具、器具及び備品	89	93	0	62	121	2,766
	土地	3,237	-	-	-	3,237	-
	リース資産	49	15	-	14	51	27
	建設仮勘定	4	4	4	-	4	-
	計	4,257	410	8	226	4,433	22,366
無形固定資産	特許権	-	150	-	9	140	-
	ソフトウェア	107	0	-	25	82	-
	電話加入権	0	-	-	-	0	-
	電気通信施設利用権	2	-	-	0	2	-
	計	109	150	-	34	226	-

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物	久喜工場屋根工事	10	百万円
機械及び装置	1号低周波誘導炉コンデンサーバンク更新	32	"
	3号鑄造機制御盤更新	15	"
	キューボラ排風機更新工事	11	"
特許権	KATANAバルブに関する業務提携における特許権	150	"

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金(流動資産)	27	29	27	29
賞与引当金	151	144	151	144
役員退職慰労引当金	19	7	-	27
貸倒引当金(固定資産)	0	-	-	0

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

特記事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
特別口座の振替 取扱場所 株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部 東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告としております。ただし事故その他のやむを得ない事由により電子公告をすることができないときは、日本経済新聞に掲載しております。 当社の広告掲載URLは次のとおりであります。 http://www.nichu.co.jp
株主に対する特典	なし

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

会社法第189条第2項各号に掲げる権利

会社法第166条第1項の規定による請求をする権利

株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第117期 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	2021年6月22日 関東財務局長に提出。
---------------------------------------	--------------------------

(2) 内部統制報告書

事業年度 第117期 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	2021年6月22日 関東財務局長に提出。
---------------------------------------	--------------------------

(3) 四半期報告書及び確認書

第118期第1四半期 (自 2021年4月1日 至 2021年6月30日)	2021年8月11日 関東財務局長に提出。
---------------------------------------	--------------------------

第118期第2四半期 (自 2021年7月1日 至 2021年9月30日)	2021年11月12日 関東財務局長に提出。
---------------------------------------	---------------------------

第118期第3四半期 (自 2021年10月1日 至 2021年12月31日)	2022年2月10日 関東財務局長に提出。
---	--------------------------

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(定時株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書	2021年6月22日 関東財務局長に提出。
--	--------------------------

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2022年6月21日

日本鑄鉄管株式会社

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員 公認会計士 稲 吉 崇
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 澤 部 直彦
業務執行社員

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本鑄鉄管株式会社の2021年4月1日から2022年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益及び包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本鑄鉄管株式会社及び連結子会社の2022年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

繰延税金資産の回収可能性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>注記事項（税効果会計関係）に記載されているとおり、2022年3月31日現在、会社及び連結子会社は、繰延税金資産285百万円（繰延税金負債相殺前）を計上している。このうち、会社は繰延税金資産146百万円（繰延税金負債相殺前）を計上している。これは連結総資産の9.3%にあたる評価性引当額1,671百万円を控除した金額である。会社は、将来減算一時差異及び税務上の繰越欠損金に対して、将来の収益力に基づく課税所得の見積りにより繰延税金資産の回収可能性を判断している。会社をとりまく経営環境は、管路老朽化が年々進展し更新の潜在需要が増大する一方、人口減少や節水等による事業体収入の減少や、高齢化等による工事の担い手不足といったジレンマが解消されない状態が継続する状況にある。このような状況において、会社は、将来の収益力に基づく課税所得の見積りを行うにあたり、取締役会によって承認された将来の事業計画を基礎としており、その重要な仮定は、予定販売単価及び見込販売量並びに見込原材料価格である。なお、会社は、当該重要な仮定について、注記事項（重要な会計上の見積り）に記載している。繰延税金資産の回収可能性の判断において、将来の事業計画における重要な仮定は不確実性を伴い、経営者による主観的な判断を必要とすることから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、繰延税金資産の回収可能性を検討するにあたり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来減算一時差異及び税務上の繰越欠損金の残高について、その解消見込年度のスケジュールリングについて検討した。 ・将来の課税所得の見積りを評価するため、その基礎となる将来の業績予測数値について、取締役会によって承認された事業計画との整合性を検討した。 ・また、経営者の事業計画策定の見積りプロセスの有効性を評価するため、過年度の事業計画と実績とを比較した。 ・将来の事業計画に含まれる重要な仮定である予定販売単価及び見込販売量並びに見込原材料価格については、経営者と協議するとともに、外部機関による国内出荷レポート及び原材料価格推移表を閲覧し、過去からの趨勢との比較分析を実施した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施す

- る。
- 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
 - 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
 - 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
 - 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
 - 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
 - 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、日本鑄鉄管株式会社の2022年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、日本鑄鉄管株式会社が2022年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2022年6月21日

日本鑄鉄管株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 稲 吉 崇

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 澤 部 直彦

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている日本鑄鉄管株式会社の2021年4月1日から2022年3月31日までの第118期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、日本鑄鉄管株式会社の2022年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

繰延税金資産の回収可能性

注記事項（税効果会計関係）に記載されているとおり、2022年3月31日現在、会社は、繰延税金資産146百万円（繰延税金負債相殺前）を計上している。これは総資産の11.3%にあたる評価性引当額1,671百万円を控除した金額である。

当該事項について、監査人が監査上の主要な検討事項と決定した理由及び監査上の対応は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（繰延税金資産の回収可能性）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載

内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業的前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業的前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。